

茨城県教育財団文化財調査報告第197集

下大井遺跡 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

国土交通省 常総国道工事事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第197集

しも おお い 下大井遺跡 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

国土交通省 常総国道工事事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県南部のつくば市周辺地域には、国の首都圏整備計画による「土浦・つくば・牛久業務核都市構想」が計画されております。

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の建設は、首都圏の中核都市を相互に結ぶことにより地域の核となる都市群を形成し、さらにこれらの地域における交通の円滑化を図り、地域の自立性を高める拠点となる都市整備を目的として計画されたものであります。その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である下大井遺跡が確認されていたため、財団法人茨城県教育財団は、建設省関東地方建設局（現国土交通省関東地方整備局）常総国道工事事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成11年4月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、すでに当財団の文化財調査報告第171集として刊行しております。

本書は平成13年度に調査を行った下大井遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所から賜りました多大なる御協力に対し、心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、菟崎町教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成13年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市（旧稲敷郡笠崎町）大字大井に所在する下大井遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調 査 平成13年4月1日～平成13年6月30日
整 理 平成14年9月1日～平成15年1月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久の指揮のもと、調査第一課第2班長川津法伸、主任調査員島田和宏、同 近藤恒重が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長川井正一の指揮のもと、主任調査員島田和宏が担当した。
- 5 発掘調査及び整理に際し、御指導・御協力を賜った関係機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標Ⅱ系座標に準拠し、 $X=+1,560\text{m}$ 、 $Y=+27,960\text{m}$ の交点を基準点(A1a)とした。なお、この原点は日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付けて併記した。

3 遺構番号は、平成11年度調査からの継続である。

4 本文・実測図・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 掘立柱建物跡-S B 土坑-S K 溝跡-S D ビット-P
土層 攪乱-K

5 土層と遺物における色調の判定には、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

6 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

7 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

焼土・施釉・赤彩		灰・火床面	
竈材・粘土・黒色処理		油煙・繊維土器	
土器 ● 土製品 ○ 石器・石製品 □ 硬化面			-----

8 遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の単位はcm及びgである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(3) 備考欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

9 「主軸」は、竈(灰)を持つ竪穴住居跡については竈(灰)を通る軸線とし、他の遺構については、長軸(長径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は、その主軸が座標北から見て、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 $N-10^{\circ}-E$)

10 遺構一覧表における計測値は、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

抄 録

ふりがな	しもおおいせき							
書名	下大井遺跡2							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	3							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第197集							
著者名	島田和宏							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2003(平成15)年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村番号						
下大井遺跡	茨城県つくば市大字大井字鶴本1385番地ほか	08445 — 598	36度 — 36度 00分 44秒	140度 08分 35秒	19 — 21m	20010401 — 20010731 — 20010901 — 20010930	1,778.03㎡	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
下大井遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡 7軒 土坑 1基	土師器(坏・碗・高坏・甕) 石器・石製品(紡錘車・双孔円板)	縄文時代から平安時代にかけての集落跡である。今回の調査区からは、四面に庇を伴う掘立柱建物跡が確認されている。			
		奈良・平安	竪穴住居跡 2軒 掘立柱建物跡 1棟	土師器(坏・甕) 灰釉陶器(碗・長頸瓶) 土製品(瓦塔)				
	その他	旧石器 縄文 不明	土坑 14基 溝跡 1条	ナイフ形石器・剥片 縄文土器(深鉢) 石器(石鏃)				

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 古墳時代の遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
(2) 土坑	23
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	24
(1) 竪穴住居跡	24
(2) 掘立柱建物跡	30
3 その他の遺構と遺物	33
(1) 上坑	33
(2) 溝跡	39
(3) 遺構外出土遺物	40
第4節 まとめ	44
写真図版	
付 図	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省は、首都圏全体の発展と交通の円滑化を図るため、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設を進めている。

平成9年1月7日、建設省関東地方建設局（現国土交通省関東地方整備局）常総国道工事事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の有無とその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は、平成10年4月20日に現地踏査を、平成10年6月9日に試掘調査を実施し、平成10年6月17日に建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長あてに工事地内に下大井遺跡が所在する旨回答した。平成10年11月17日、建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道建設事業地内における埋蔵文化財（下大井遺跡）の取り扱いについて協議書が提出された。平成11年3月15日、茨城県教育委員会教育長は建設省関東地方建設局常総国道工事事務所長あてに、下大井遺跡について、記録保存のための発掘調査を実施するよう回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

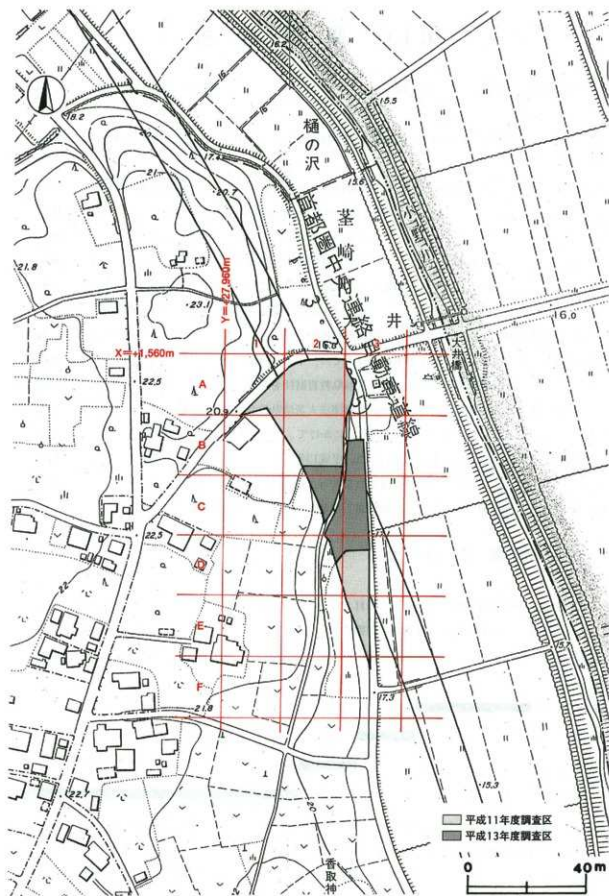
建設省関東地方建設局常総国道工事事務所と財団法人茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を結び、平成11年4月1日から8月31日にかけて、用地の手当てのできない部分（2,055㎡）を除いた下大井遺跡（4,136.78㎡）の発掘調査を実施した。平成13年3月28日、茨城県教育委員会教育長は、試掘調査（平成12年7月17日実施）の結果、遺構が確認されなかった部分を除いた木調査部分（1,778.03㎡）の平成13年度調査計画を国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所長あてに通知した。

第2節 調査経過

下大井遺跡の発掘調査期間は、平成13年4月1日から同年7月31日及び同年9月1日から同年9月30日である。しかし、市ノ台屋敷遺跡の発掘調査も同期間内に行うことになっていたため、当遺跡の発掘調査は平成13年4月1日から6月30日までの3か月間実施した。以下、調査の経過について、その概略を工程表で記載する。

工 程	4 月	5 月	6 月
調査準備	■		
民間・試掘		■	
表土除去 遺構確認		■	
遺構調査			■

なお、調査区は便宜上、A区、B区に分けられている（第1図）。今回の調査区域は農道を挟んで東西に分かれるため、農道の西側を平成11年度調査のA区に、東側をB区に、それぞれ含ませることとした。B区内の大部分は、旧地表から2mほど削平されている。最も残存状況が良いと思われたD2a6区にトレンチを入れ調査した結果、粘土層まで削平されたうえ土盛されていることが判明した。そのため、B区内の調査区域は調査対象から除外した。



第1図 調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

下大井遺跡は茨城県つくば市（旧稲敷郡某崎町）大字大井1385番地ほかに所在し、小野川右岸の筑波・稲敷台地と呼ばれる台地上に立地している。

この台地は、北側を八溝山地の南端に位置する筑波山を中心とする筑波山塊と接し、東側を東流して霞ヶ浦に流入する桜川と西側を南流する小貝川によって挟まれた、標高20～25mほどの平坦な台地である。台地は花室川、蓮沼川、小野川などの中小河川の開析により、浅い谷津が数多く形成されている。地質的には、貝化石を産する海成の砂層である成田層を基盤として、その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂層・砂礫層、さらに常総粘土層と呼ばれる泥質粘土層（0.3～5.0m）、褐色の関東ローム層（0.5～2.5m）が連続して堆積し、最上層は高食土層となっている¹⁾。

当遺跡は、小野川の開析によって形成された台地縁辺部に立地し、台地の標高は18～21mである。台地は主に宅地・畑地・平地林として利用され、小野川流域の沖積低地は水田として利用されている。遺跡の現況は、宅地・山林であった。

第2節 歴史的環境

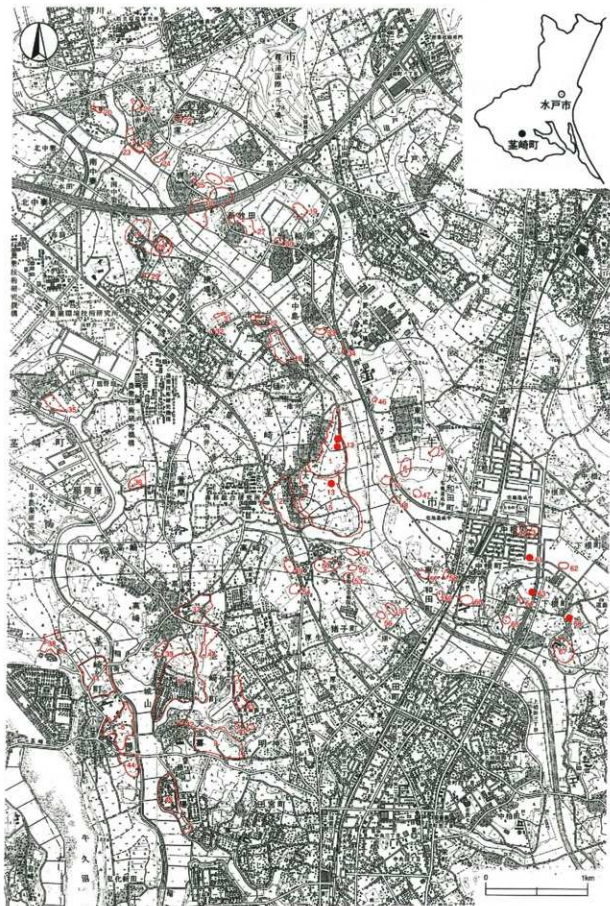
下大井遺跡の所在する地域は、牛久沼周辺や小野川、稲荷川水系によって開析された台地上に位置し、数多くの遺跡が所在している（第2図）。ここでは、主に小野川、稲荷川流域の遺跡について述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、乙戸川や小野川、稲荷川を臨む台地縁辺部に点在している。五十塚古墳群<2>は、小野川右岸に位置する古墳群であり、第5号墳の前方部周溝内から刃器が出土している²⁾。また、乙戸川と小野川に挟まれた台地上のヤツノ上遺跡<3>、中久喜遺跡<4>からは、ナイフ形石器、剥片などが出土している。

縄文時代には、小野川・稲荷川流域の台地上に集落が形成されるようになる。小野川沿いでは、当遺跡に南接する大井遺跡<5>、牛久市の馬場遺跡<6>、東山遺跡<7>などがある。稲荷川沿いの小至貝塚<8>、大至貝塚<9>は中期の大遺跡である³⁾。

弥生時代の遺跡は、当遺跡周辺では極めて少なく、高見原番外遺跡<10>、天宮喜C遺跡が確認されているだけである。

古墳時代になると、遺跡数は増加する。当遺跡周辺の古墳時代の集落跡としては、当財団の調査により小野川を挟んで当遺跡の対岸に、東山遺跡⁴⁾、馬場遺跡⁵⁾、行人田遺跡⁶⁾<11>などが所在することが明らかになった。行人田遺跡は前期、東山遺跡は中期、馬場遺跡は中期から後期にかけての集落跡である。当遺跡の北方には、平成13年度に当財団により調査された市ノ台摩訶遺跡<12>が所在し、中期の集落跡であることが確認されている。また、小野川・稲荷川両河川沿い及びその周辺には多くの古墳群が確認されている。当遺跡の南方には、下大井古墳群<13>、五十塚古墳群があり、五十塚古墳群は前方後円墳2基、円墳9基以上から形成されていることが確認されている⁷⁾。さらに小野川の上流域には、下橋場古墳群<14>、赤塚胸形古墳群<15>があり、平成12・13年度に当財団の調査により、二重の壘を持つ居館が確認された既内山遺跡<16>との関連が



第2図 周辺遺跡分布図 (国土地理院「谷田部」・「土浦」・「藤代」・「牛久」)

表1 周辺遺跡一覧表

番 号	遺 跡 名	時 代						番 号	遺 跡 名	時 代							
		旧 石 器	縄 文 文	弥 生	古 墳	奈良・ 平安	中 世			近 世	旧 石 器	縄 文 文	弥 生	古 墳	奈良・ 平安	中 世	近 世
1	下大井遺跡	○	○		○	○	○	○	35	中山鹿島遺跡	○	○		○	○	○	○
2	五上塚古墳群				○				36	菅間遺跡		○			○	○	○
3	ヤツノ上遺跡	○	○		○	○	○		37	藤中塚古墳群			○				
4	中久喜遺跡	○			○	○			38	稲荷山西墳群		○					○
5	大井遺跡	○	○		○	○	○	○	39	孝学院遺跡	○					○	
6	馬場遺跡		○		○	○			40	高見原A遺跡	○						○
7	東山遺跡		○		○	○			41	小塚北遺跡	○		○			○	○
8	小笠貝塚	○	○			○	○	○	42	天室宮貝塚	○					○	○
9	天室宮C遺跡	○	○	○	○			○	43	高見原B遺跡	○		○				
10	高見原番外遺跡		○	○					44	小玉南遺跡	○			○	○	○	○
11	行人出遺跡				○	○		○	45	天室宮西遺跡	○			○			
12	市ノ台早敷遺跡				○			○	46	大久保遺跡			○				
13	下大井古墳群				○				47	榎谷原遺跡		○	○				
14	下横場古墳群				○				48	坂本遺跡	○						
15	赤塚駒形古墳群				○				49	山際A遺跡	○						
16	堀内向山遺跡		○		○	○	○	○	50	道山古墳群			○				
17	高崎城跡				○	○	○	○	51	守了橋遺跡	○						
18	樋の沢久保遺跡	○	○		○		○	○	52	宮坂古墳			○				
19	樋岡遺跡	○						○	53	道山下遺跡			○				
20	鹿野久保遺跡				○			○	54	山際B遺跡	○						
21	赤塚八木遺跡				○				55	稲荷下遺跡			○				
22	赤塚木山遺跡				○			○	56	古屋敷遺跡			○				
23	赤塚駒形遺跡				○				57	塚原山古墳群			○				
24	赤塚前口遺跡				○				58	中宿遺跡			○				
25	堀内遺跡				○				59	根柄遺跡		○	○				
26	赤塚原前遺跡							○	60	小尾前遺跡			○				
27	新牧田遺跡				○				61	ヤツノ上古墳			○				
28	下横場遺跡				○				62	中ト根遺跡	○	○		○	○		
29	下横場西谷津遺跡		○						63	愛宕脇古墳			○				
30	稲岡八方塚群							○	64	栗ノ木遺跡			○				
31	下横場山手前遺跡		○					○	65	宮ノ台遺跡		○	○				
32	市ノ台壘ノ木内遺跡				○				66	塚塚古墳			○				
33	北中島遺跡		○		○				67	水落下遺跡			○				
34	北中島明神下遺跡		○														

想起される。

奈良・平安時代は、当遺跡の中心的な時代と考えられる。律令体制が確立するなか、当遺跡周辺は河内郡に編入されることになる。河内郡衙は、当遺跡から北へ約9kmの距離に位置する板地区の金田遺跡に比定されており、『和名類聚抄』によれば、当遺跡周辺は河内郡河内郷に属する¹⁰⁾。奈良・平安時代の遺跡は、近年の発掘調査の増加にもかかわらず、古墳時代に比べると少なく、小野川流域では、当遺跡の他に大井遺跡、靴内山遺跡、ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡などが確認されているだけである。

平安時代末期以降、当遺跡周辺は大井庄と呼ばれる。中世以降で確認されている遺跡は、城館跡がほとんどであり、応永3年(1396年)小田治朝の子岡野宮内少輔康朝が築城したと言われる¹¹⁾泊崎城跡¹²⁾がある。泊崎城跡は、昭和54年の発掘調査により内濠・外濠・土塁に囲まれた連郭式の平山城で、本丸跡・濠・土塁等が確認されている。また、稲荷川沿いに戦国時代勢力を拡大していった岡見氏の支城であった高崎城跡¹³⁾が稲荷川左岸に確認されている。

近世の遺跡としては、平成13年度に当財団が調査した結果、小野川右岸の樋の沢久保遺跡¹⁴⁾(18)が近世を中心とした屋敷跡、小野川左岸の榎岡遺跡¹⁵⁾(19)が中世末期から近世初期にかけての築城であることが確認されている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第2図及び表1の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 茅崎町史編さん委員会『茅崎町史』茅崎町 平成6年3月
- 3) 小高五十二『牛久北部特定土地地区再整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) ヤツノ上遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第81集 茨城県教育財団 1993年3月
- 4) 荒井保雄『牛久北部特定土地地区再整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 中久喜遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集 茨城県教育財団 1993年9月
- 5) 註2)と同じ
- 6) 松浦 敏『牛久北部特定土地地区再整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 東山遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第101集 茨城県教育財団 1995年9月
- 7) 白田正子『牛久北部特定土地地区再整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 馬場遺跡 行人田遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集 茨城県教育財団 1996年3月
- 8) 註7)と同じ
- 9) 註2)と同じ
- 10) 池邊 備『和名類聚抄郡名評名考説』吉川弘文館 1981年2月
- 11) 茅崎町教育委員会『泊崎城跡』1980年8月
- 12) 茂木悦男『樋の沢久保遺跡』『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第186集 茨城県教育財団 2002年3月
- 13) 茂木悦男『稲岡遺跡』『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第187集 茨城県教育財団 2002年3月

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図(地名表編)』茨城県教育委員会 平成13年3月
- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図(地図編)』茨城県教育委員会 平成13年3月

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

平成11年度の調査では、旧石器時代の石器集中地点1か所、縄文時代の住居跡8軒、炉穴1基、古墳時代の竪穴住居跡4軒、土坑1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡16軒、土坑1基、中世の塚1基、上墳墓1基、時期不明遺構1基、不明土坑54基、溝跡3条が検出されている。今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡7軒、土坑1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、時期不明の土坑14基、溝跡1条が検出された。以上のとおり、平成11年度の調査及び今回の調査で、当遺跡は、平安時代を中心とする縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に20箱出土している。主な遺物としては、旧石器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器・石製品、土製品などが出土している。当遺跡における遺物の特徴は、奈良・平安時代の黒書土器及び瓦塔片が出土していることである。

第2節 基本層序

今回の調査区は、試掘調査の結果、遺構が密集しテストピットを設定する余地がなく、また平成11年度調査区に隣接することから、平成11年度の基本層序を参考に調査を進めることにした。以下、「茨城県教育財団文化財調査報告第171集」より、基本層序を転載する。

当遺跡のA区内（B2a3）にテストピットを設定し、深さ約2mまで掘り下げて、土層の堆積状況を確認した（第3図）。

第1層は、暗褐色の表土層で、粘性は弱く、しまりもあまりない。層厚は28～46cmである。

第2層は、褐色のソフトローム層で、炭化粒子を極少量含んでいる。粘性は普通で、しまりはあまりない。層厚は12～20cmである。

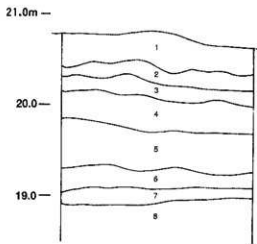
第3層は、褐色のソフトローム層で、ローム小ブロックを少量含んでいる。粘性は普通で、しまりはあまりない。層厚は10～24cmである。

第4層は、褐色のハードローム層への漸移層で、ローム中・小ブロックを少量含んでいる。粘性・しまりとも普通である。層厚は25～45cmである。

第5層は、褐色のハードローム層で、粘性・しまりとも強い。層厚は40～55cmである。

第6層は、明褐色のハードローム層で、粘性・しまりとも強い。層厚は15～26cmである。

第7層は、にぶい褐色の粘土層で、白色粒子を中量含んでいる。極めて粘性・しまりとも強い。層厚は13～24cmである。



第3図 基本土層図

第8層は、にぶい黄棕色の粘土層で、白色中・小ブロック・白色粒子を多量含んでいる。極めて粘性・しまりとも強い。

遺構は、第1層下面及び第2層上面で確認され、第2層から第3層にかけて掘り込んでいる。

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡7軒、土坑1基が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記載する。なお、平成11年度の調査で一部が報告されている遺構や遺物については、『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集（以下『第171集』と略す）から実測図・出土遺物解説を転載し、今回調査した部分と併せて報告する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第4図） 【第171集】参照

位置 調査A区南部のB215区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

確認状況 南東コーナー部が削平された状態で確認された。

重複関係 南部を第29号住居、第4号溝に掘り込まれ、第1号塚が本跡の覆土上に構築されている。

規模と形状 今回の調査で新たに検出されたP4の位置から、一辺5.20mほどの方形と推定される。主軸方向はN-82°-Eである。壁高は8~36cmで、外傾して立ち上がっている。

床 確認できた範囲内では、壁際を除いて踏み固められている。また、断面U字形の壁溝が西壁及び北壁の壁下を巡っている。

炉 P3とP4を結ぶ線よりも西壁寄りに付設されている。長軸70cm、短軸45cmの不定形で、長軸方向は住居の主軸方向と同一である。炉床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて5cmほどの厚さで赤変硬化し、凹凸が著しい。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|------|---------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒多量 | 3 褐色 | ロームの硬化石 |
| 2 赤褐色 | ロームの赤変硬化石 | | |

ピット 4か所。P1・P3・P4は深さ12~45cmで、規模と配置から主柱穴である。P1に対応する南東コーナー部に想定される主柱穴は、第4号溝に掘り込まれて残存しない。P2は東壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

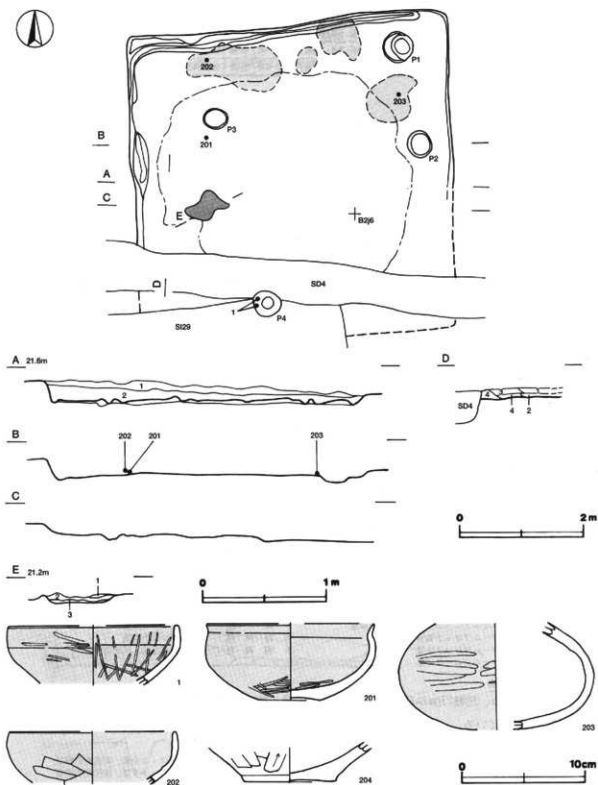
覆土 4層に分層される。全体的に剛開から上砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 今回の調査範囲内からは、土師器片96点（坏類45、甕類51）が出土している。1はP4内から出土した破片を接合した資料である。201は中央部の床面から、202は北壁際の下層から、203は東壁寄りの下層から、204は覆土中から、それぞれ出土している。また、炉付近の床面からは炭化材が検出されている。

所見 今回の調査で、炉及び主柱穴が検出できたため、規模を推定することができた。また、床面からは炭化材が検出されており、前回調査時の焼上及び炭化物の検出状況と合わせて、本跡は焼失住居の可能性が高い。時期は、出土土器から中期（5世紀後半）と考えられる。



第4図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第4図) 200番台の遺物は報告済みである。

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[13.6]	(4.9)	—	赤母・長石・石英	にじみ焼	普通	体部外面へう磨り内へう磨き、内面へう磨き	P 4 内	40%
201	土師器	坏	[13.6]	6.2	5.0	長石・石英・赤色粒子	にじみ焼	普通	体部外面へう磨り内へう磨き、内面へう磨き	中央部外面	40%

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
202	土師器	坏	13.4	(4.2)	—	灰白・石灰・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面へう磨り、内面ナデ	北壁際下層	20%
203	土師器	埴	—	(8.6)	—	灰白・黄骨・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面へう磨き	東部下層	60%
204	土師器	甕	—	(3.2)	[7.6]	灰白・黄骨・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面へう磨り	甕上中	5%

第29号住居跡 (第5・6図)

位置 調査A区南部のC2a5区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込み、第75号土坑、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.75m、短軸5.65mの方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は20~50cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。地山のロームを平坦に掘り込み、床面としている。また、断面じ字形の壁溝が北壁下の一部を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。煙道部の先端が第4号溝に掘り込まれて残存しないため、確認できた規模は、焚口部から残存する煙道部先端まで100cm、壁外への掘り込みは25cmほどである。袖部幅は95cmほどである。天井部は崩落しており、竈土層断面図中の第5・7層が天井部の崩落土の一部である。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は、ほぼ平坦で北壁ラインの内側に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量	11	暗赤褐色	焼土ブロック・砂粒中量
2	暗褐色	砂粒多量、焼土粒子少量、ロームブロック微量	12	にぶい暗褐色	砂粒中量、焼土粒子、粘土粒子少量
3	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・砂粒少量	13	褐色	粘土粒子少量、焼土粒子微量
4	暗褐色	焼土粒子・砂粒少量	14	暗赤褐色	砂粒中量、焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化物微量
5	暗褐色	焼土ブロック少量、焼土ブロック微量	15	褐色	粘土粒子・砂粒少量、炭化物微量
6	褐色	焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量	16	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子微量
7	にぶい赤褐色	焼土ブロック・砂粒中量	17	暗褐色	粘土粒子中量、炭化物・焼土粒子・砂粒少量
8	暗褐色	砂粒中量、焼土粒子・粘土粒子少量	18	にぶい赤褐色	砂粒中量、粘土粒子少量、焼土粒子微量
9	暗褐色	粘土粒子少量、焼土粒子微量			
10	褐色	砂粒中量、焼土ブロック・焼土粒子少量			

ピット 6か所。P1~P4は深さ42~57cmで、規模と配置から主柱穴である。P5・6は南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

ピット土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	6	褐色	ローム粒子中量
2	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7	褐色	ロームブロック中量
3	褐色	ロームブロック微量	8	暗褐色	ロームブロック少量
4	褐色	ロームブロック少量	9	暗褐色	ローム粒子少量、炭化物微量
5	暗褐色	ロームブロック中量			

貯蔵穴 長軸105cm、短軸73cmの長方形、深さ40cmほどで、竈の東側に位置している。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	4	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	5	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量			

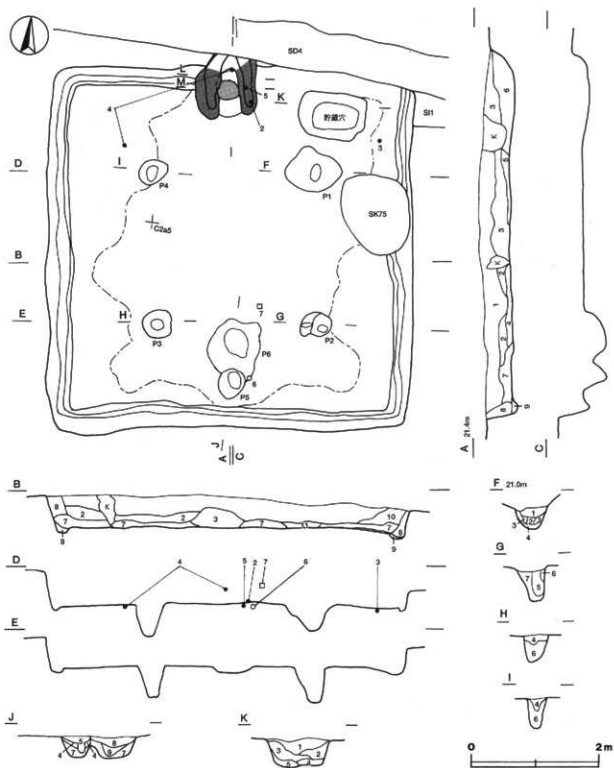
覆土 11層に分層される。ブロック状の堆積状況を示しており、人為堆積である。

土層解説

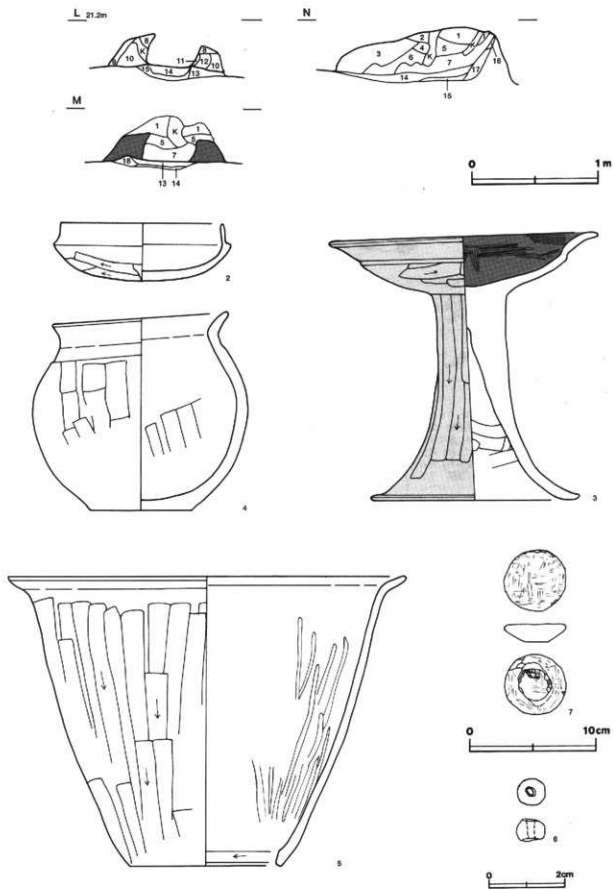
1	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	6	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・焼土粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	7	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量	8	暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子中量	9	暗褐色	ロームブロック微量
5	暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック少量
			11	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片455点(坏類82, 甕類373), 土製品1点(土玉), 石器1点(紡錘車)が北壁寄りの床面を中心に出土している。3は北東コーナー部の床面から横位で, 6は南壁寄りの床面, 7は中央部の覆土上層から, それぞれ出土している。また, 4の破片の大部分は北西部の床面から出土し, 竈の覆土中から出土した破片と接合関係にある。

所見 時期は, 出土土器から後期(6世紀後半)と考えられる。



第5図 第29号住居跡実測図



第6图 第29号住居跡・出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表 (第6図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	土師器	坏	12.6	4.5	—	雲母・長石・石英	にぶい焼	普通	体部外面へう割り、内面ナデ	遺棄跡上	98% IL7
3	土師器	高坏	21.3	21.2	16.0	雲母・長石・赤色粒子	明赤焼	普通	坏部・胴部内面へう割り、坏部内面へう割り	北東部床面	100% PL7
4	上滑器	甕	13.6	15.8	8.0	雲母・長石・石英	にぶい焼	普通	体部外面へう割り、内面へう割り	北西部床面	68% PL5
5	上滑器	甕	[31.2]	23.0	[12.0]	雲母・長石・石英	にぶい焼	普通	体部外面へう割り、内面へう割り	遺棄跡上	3%

番号	器種	取込径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
6	上玉	0.7	0.6	0.2	0.2	土製	ナデ、片面穿孔	南西部床面	
7	鈴鐘	1.9	1.4	—	48.4	滑石	朱穿孔、上面に鐘痕有り	中央部1層	PLB

第30号住居跡 (第7・8図)

位置 調査A区南部のB2江区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第36号住居跡を掘り込み、第64・71・74号土坑、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.90m、短軸5.85mの方形で、主軸方向はN-2°Eである。壁高は20~30cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平円で、東西の壁際を除いてよく踏み固められている。地山のロームを平用に掘り込み、床面としている。また、断面U字形の壁溝が北壁下を除いて通っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。重複及び木根による擾乱のため、西袖部の一部が残存するのみである。袖部は、にぶい黄褐色を呈する砂質粘土で構築されている。

ピット 5か所。P1~P3は、深さ30~35cmで、規模と配置から竈柱穴である。北東部に想定される竈柱穴は、床面を稍直したが、検出されなかった。P4は南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

ピット土層解説

1	褐色	ロームブロック少量	6	褐色	ローム粒が中粒、焼土ブロック微量
2	褐色	ロームブロック中量	7	暗褐色	ローム粒子中量
3	褐色	ローム粒子中粒	8	褐色	ローム粒が少量、焼土粒が微量
4	黒褐色	ローム粒子少量	9	暗褐色	ロームブロック微量
5	暗褐色	ローム粒が少量	10	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

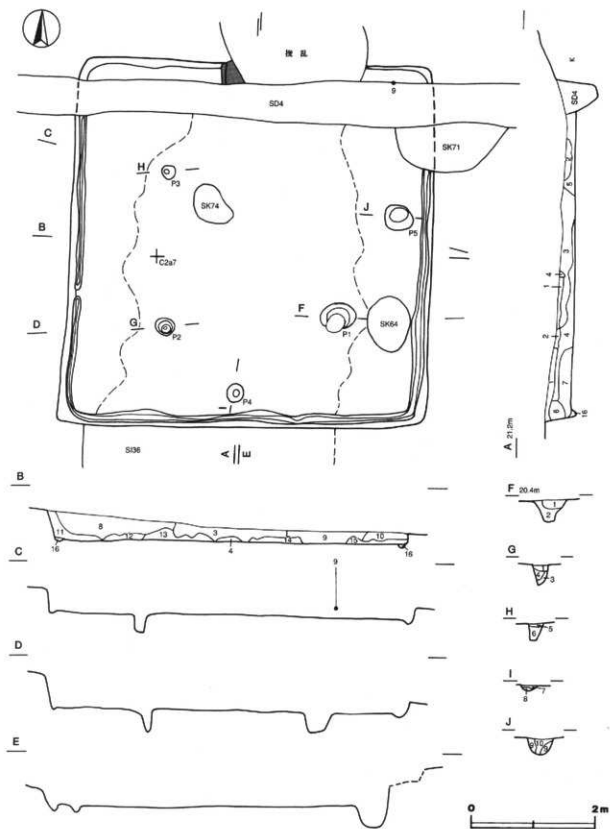
覆土 16層に分類される。ブロック状の堆積状況を示しており、人為堆積である。

土層解説

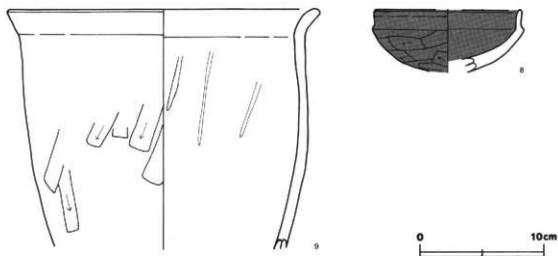
1	暗褐色	ローム粒が少量、焼土粒・炭化粒子微量	9	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	10	暗褐色	ロームブロック・焼土粒が微量
3	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	11	暗褐色	ロームブロック少量
4	褐色	ロームブロック中量、焼土粒が微量	12	褐色	ローム粒子少量
5	褐色	ローム粒子中量、焼土粒が微量	13	褐色	ロームブロック中量
6	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒が微量	14	暗褐色	ロームブロック・炭化粒が微量
7	褐色	ロームブロック少量	15	暗褐色	ローム粒子少量
8	黒褐色	ロームブロック少量	16	褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片161点(坏類12、甕類149)が散在した状態で出土している。出土した土器片の大半は細片であり、さらに復元できるものがほとんどないことから、大部分は本住居が埋め戻される際に混入したものと考えられる。8は覆土中から出土している。9は北壁際の床面近くからの出土であり、本跡に伴うものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期(6世紀後半)と考えられる。



第7图 第30号住居跡実測図



第8図 第30号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡出土遺物観察表 (第8図)

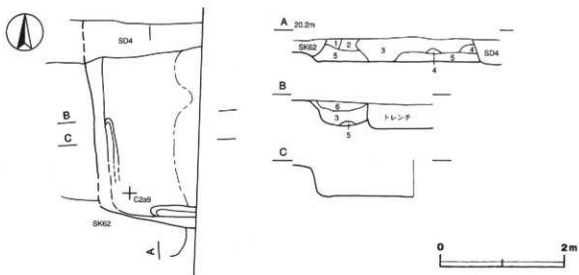
番号	種別	器種	口径	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	土師器	坏	[11.8]	(5.0)	—	—	雲母・長石・石英	にひ・赤褐色	普通	体部外面へう削り	覆土中	6%
9	土師器	甌	21.5	(19.3)	—	—	雲母・長石	にひ・粗	普通	体部外面へう削り、内面へう磨き	総器底縁上	7% PL7

第31号住居跡 (第9図)

位置 調査A区南部のB2区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第62号土坑、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外であり、北部を第4号溝に掘り込まれているため、確認できた南北長は2.90m、東西長は1.70mである。平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-3°-Wである。壁高は45cmほどで、各壁ともほぼ直立している。



第9図 第31号住居跡実測図

床 調査範囲内はほぼ平坦で、壁際を除いてよく踏み固められている。地山のロームを平坦に掘り込み、床面としている。また、断面U字形の壁溝が両壁下及び南壁下の一部を巡っている。

竈 検出されていないが、調査区域外に存在している可能性がある。

ピット 床面を精査したが、調査範囲内では検出されていない。

覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示しており、人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子中量	4 暗褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ロームブロック少量	5 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器甕類の体部片5点が出土している。これらの形状は球形で、外面にヘラ削りが施されているが、いずれも細片のため図示できるものはない。

所見 時期は、出土土器の様相から古墳時代と考えられる。

第34号住居跡 (第10図)

位置 調査A区南部のC2c9区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第78号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北長は4.80m。東部が調査区域外のため、東西長は2.50mが確認された。平面形は方形または長方形と推定される。主軸方向はN-3°-Wである。壁高は15~20cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、特に踏み固められた部分は見られない。地山のロームを平坦に掘り込み、床面としている。また、壁溝は検出されていない。

竈 検出されていないが、調査区域外に存在している可能性がある。

ピット 2か所。P1は深さ75cm、規模と位置から柱穴である。P2は深さ30cmで、P1に隣接しており、補助柱穴の可能性がある。

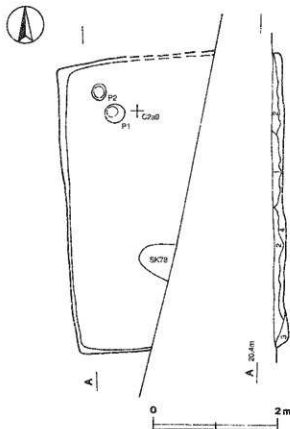
覆土 4層に分層される。ブロック状の堆積状況を示しており、人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片40点(坏類5、甕類35)が散在した状態で出土している。坏類の破片は黒色処理された須恵器坏身の模倣坏片であるが、いずれも細片のため図示できるものはない。

所見 時期は、出土土器の様相から後期と考えられる。



第10図 第34号住居跡実測図

第35号住居跡 (第11~14段)

位置 調査A区南端のC247区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1号孤立柱建物、第68号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 一辺7.10mほどの方形で、主軸方向はN-7°-Wである。壁高は25~40cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、東西の壁際を除いてよく踏み固められている。各コーナー部を除いて、地山のロームを平坦に掘り込み床面としている。各コーナー部は、ローム主体の暗褐色土を埋した貼床である。また、断面U字形の壁溝が北壁下の一部を除いて巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部先端まで175cm、壁外への掘り込みは50cm、袖部幅は140cmほどである。残存状況は悪く、天井部は崩落しており、袖部は基部のみが残存している。上層断面図中の第4~7層が天井部の崩落土の一部である。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床部から煙道部にかけては、掘り方を埋土してつくられている。火床は、浅い皿状で北壁ラインの内側に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は外傾して緩やかに立ち上がり、その後ほぼ直立する。

竈土層解説

1 暗褐色	焼土粒子中量	13 暗褐色	焼土粒子・砂粒中量、粘土粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	14 褐色	粘土ブロック・砂粒中量、焼土粒子微量
3 暗褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量	15 褐色	焼土粒子中量、粘土ブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子多量	16 濃い暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量
5 暗褐色	砂粒中量、粘土粒子少量、粘土ブロック・炭化物微量	17 赤褐色	粘土ブロック中量
6 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、砂粒微量	18 濃い暗褐色	粘土ブロック中量、粘土粒子少量
7 暗赤褐色	焼土ブロック中量	19 暗赤褐色	焼土ブロック少量、粘土粒子微量
8 暗赤褐色	焼土ブロック少量	20 褐色	粘土ブロック少量、粘土粒子微量
9 暗赤褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック少量	21 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
10 暗赤褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量	22 褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量
11 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子微量		
12 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量		

ピット 5か所。P1~P4は深さ52~75cmで、規模と配置から柱穴である。P5は南壁寄りの中央に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物・粘土粒子微量	9 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	10 褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量	12 褐色	ロームブロック中量
5 褐色	ローム粒子中量	13 褐色	ロームブロック少量
6 褐色	ローム粒子少量	14 暗褐色	ロームブロック少量
7 暗褐色	ローム粒子少量	15 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
8 褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量	16 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量

貯蔵穴 長軸113cm、短軸100cmの長方形、深さ30cmほどで、竈の東側に位置している。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

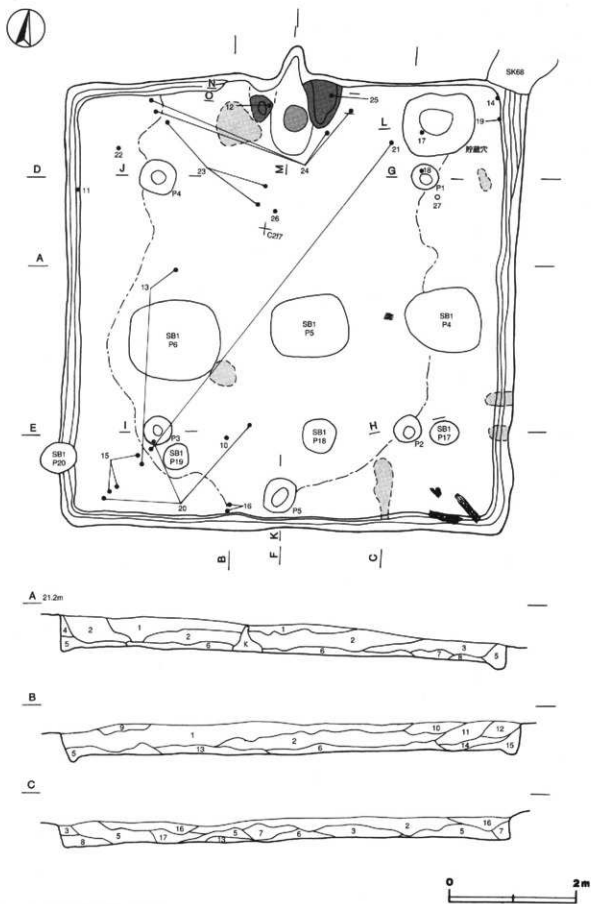
貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・炭化物中量、粘土ブロック微量	4 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色	炭化物・粘土粒子中量、ロームブロック少量	5 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック中量		

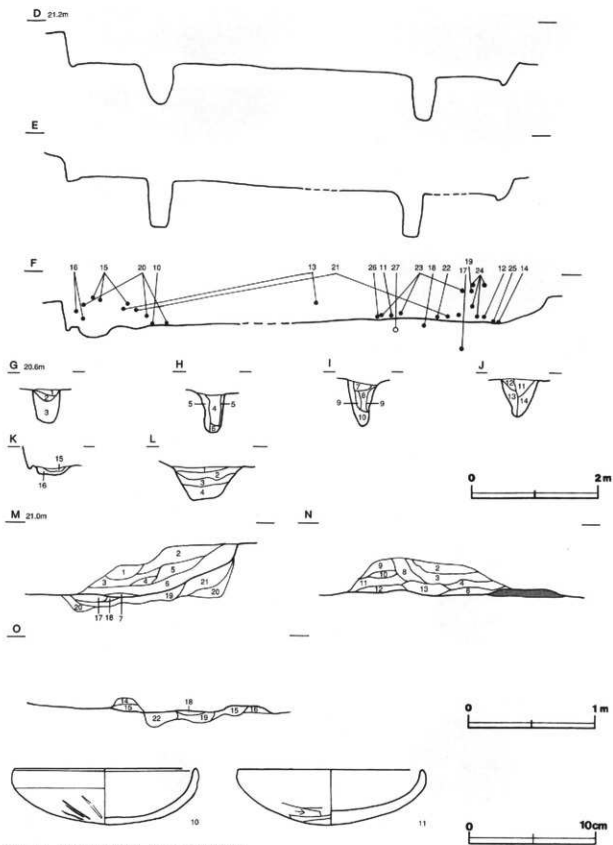
覆土 17層に分層される。ブロック状に堆積した様相を呈しており、人為堆積である。

土層解説

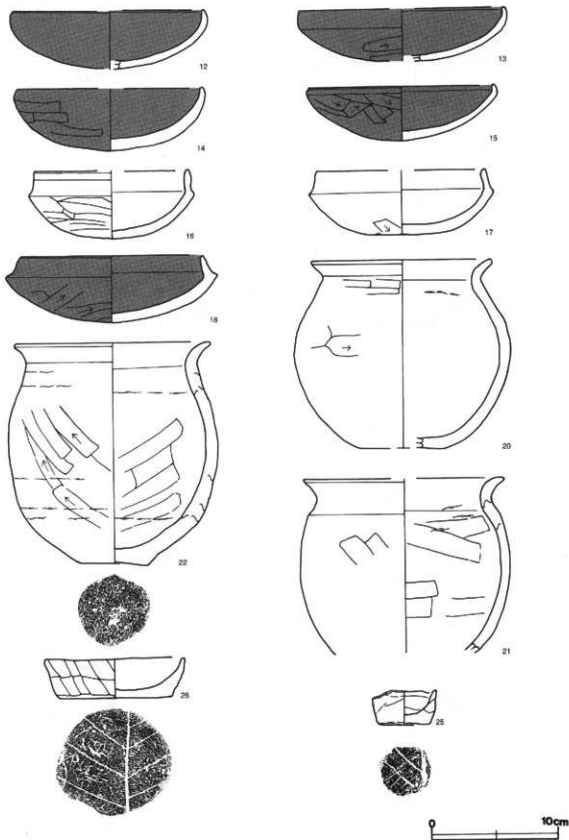
1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子中量
2 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック・砂粒少量、粘土粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量	12 褐色	ローム粒子・砂粒中量、粘土粒子・炭化粒子少量
5 黒褐色	砂粒中量、ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	13 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
6 黒褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量	14 暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
7 暗褐色	焼土粒子・炭化物中量、ロームブロック少量	15 褐色	焼土ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量
8 暗褐色	ローム粒子多量、炭化物中量、粘土粒子少量	16 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量
	焼土粒子中量、ロームブロック少量	17 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物・粘土粒子微量



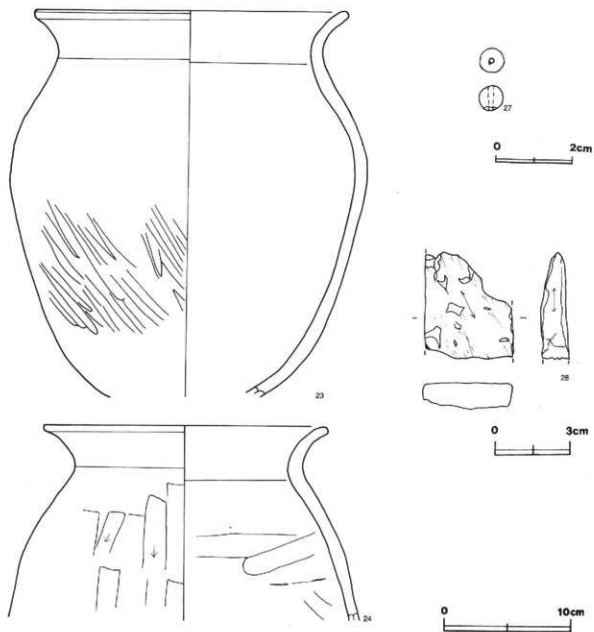
第11图 第35号住居跡実測図



第12图 第35号住居跡・出土遺物実測図



第13图 第35号住居跡出土遺物実測図(1)



第14図 第35号住居跡出土遺物実測図②

遺物出土状況 土師器片1298点(坏類259, 甕類1039), 土製品1点(土玉), 石器1点(砥石)が出土している。比較的大形の破片は、壁際の覆土上層から中央部の中層にかけて出土しており、その破片を接合した資料が13・20・21などである。これらは、その出土状況から、本跡が埋め戻される過程で投棄されたものと考えられる。また、10・11・18・25は床面から正位の状態出土している。なお、壁際の床面上からは、多量の焼土塊と炭化材が検出されている。炭化材は壁際から中央部に向かって検出されており、南東コーナー部のものは一辺5cmほどの角材である。

所見 本跡は、焼土及び炭化材の検出状況から焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から後期(6世紀後半)と考えられる。

第35号住居跡出土遺物観察表 (第12~14図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	土師器	坏	14.4	4.4	—	雲母・長石	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面内側調整不明	南西部床面	25% 第7図
11	土師器	坏	14.6	4.4	—	雲母・長石・石英	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面内側調整不明	西西部床面	25% 第7図
12	土師器	坏	[15.0]	(4.5)	—	雲母・長石・石英	にぶい	普通	体部内・外面厚減調整不明	遺掘土中	25%
13	土師器	坏	[16.2]	(4.1)	—	雲母・長石・石英	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面厚減調整不明	—	25%
14	土師器	坏	[14.6]	5.1	—	雲母・長石・石英	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面厚減調整不明	北東部床面	55% 第7図
15	土師器	坏	14.6	4.3	—	雲母	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面ナデ	南西部上層	25% 第7図
16	土師器	坏	[12.4]	5.2	—	雲母・石英	灰 褐	普通	体部外面へう削り、内面内側調整不明	北東部床面	25% 第7図
17	土師器	坏	[13.4]	5.1	—	雲母・長石・石英	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面ナデ	貯蔵穴内	55%
18	土師器	坏	14.4	5.2	—	雲母・長石	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面内側調整不明	北東部床面	55% 第7図
20	土師器	甕	14.0	14.8	[6.4]	雲母・長石・石英	明赤 黒	普通	体部外面へう削り、内面内側調整不明	南西部床面	25% 第8図
21	土師器	甕	[16.0]	(13.8)	—	雲母・長石・石英	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面ヘラナデ	北東部・南西部下層	25%
22	土師器	甕	15.3	17.7	5.6	長石・石英	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面ヘラナデ	北西部床面直上	55% 第8図
23	土師器	甕	24.2	(30.7)	—	雲母・長石・石英	にぶい	普通	体部外面へう削り、内面内側調整不明	北東部床面	25% 第8図
24	土師器	甕	22.4	(15.3)	—	雲母・長石・石英	赤 褐	普通	体部外面へう削り、内面ヘラナデ	北部下層	55%
25	土師器	手捏土器	5.0	2.7	3.8	雲母・石英	明赤 黒	普通	口縁部、体部内・外面削ナデ	南東部上層	55% 第8図
26	土師器	坏	11.9	3.0	8.8	雲母・長石・石英	にぶい	普通	体部外面輪郭み張り痕を残す指頭痕、内面ヘラナデ	遺掘床面直上	55%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
27	土 玉	0.6	(0.6)	0.1	(0.2)	土 製	ナデ、片面穿孔 一部欠損	北東部床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
28	紙 石	(4.2)	(3.5)	(1.1)	(17.2)	凝灰岩	断面1面残存、裏面剝離	腹 上 中層	

第36号住居跡 (第15図)

位置 調査A区南部のC 2b7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

確認状況 東部が床面下まで削平された状態で確認された。

重複関係 北部を第30号住居に、南部を第33号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東西長は、主柱穴と考えられるピットの位置から推定して4.65mである。残存する南北長は2.25mである。主軸方向はN-0°で、平面形は方形もしくは長方形と推定される。壁高は最大25cmほど、ほぼ直立している。

床 ほぼ平州で、特に踏み固められたところは見られない。また、壁溝は検出されていない。

ピット 2か所。P1・P2ともに深さは25cmで、配置から主柱穴の可能性が高い。

ピット土層解説

1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	4	褐色	ロームブロック少量
2	褐色	ローム粒子中量	5	褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	ローム粒子少量			

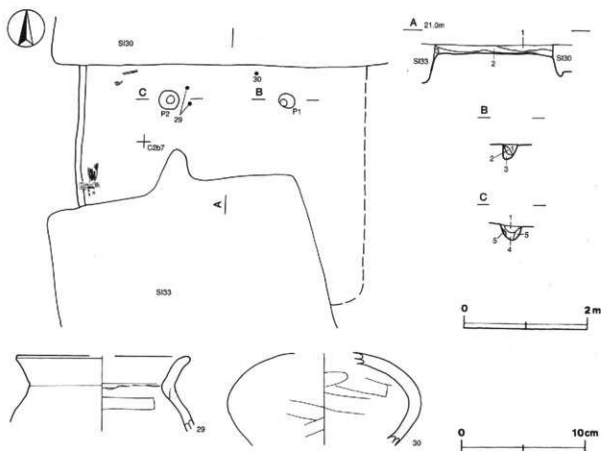
覆土 3層に分層される。覆土が薄いため判断が困難であるが、周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、炭七粒子・炭化粒子微量	3	褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ローム粒子少量、炭七粒子微量			

遺物出土状況 土師器片71点（環類12、甕類59）が散在した状態で出土しており、その大半は細片である。29・30は、ともに中央部の床面から出土している。また、西壁際の床面から炭化材が検出されている。

所見 本跡の床面からは、焼土は検出されていないものの炭化材が検出されており、焼失住居の可能性がある。時期は、出土土器から中期（5世紀代）と考えられる。



第15図 第36号住居跡・出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
29	土師器	甕	[13.7]	(6.1)	—	雲母・長石	にぶい青	普通	口縁部内・外両側ナデ、体部内面ヘラナデ	中央部床面	5%
30	土師器	甕	—	(7.4)	—	雲母・長石	赤	普通	体部外面下平ヘラ削り、体部内面ナデ	中央部床面	20%

(2) 土坑

第80号土坑（第16図）

位置 調査A区南部のB 2 j8区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南側が第4号溝に掘り込まれているため、確認できた南北長は50cmほどである。東西長は70cmほどで、平面形は、円形または楕円形と推定される。底面はほぼ平坦で、深さは40cmほどである。壁は外傾して立ち上がっている。

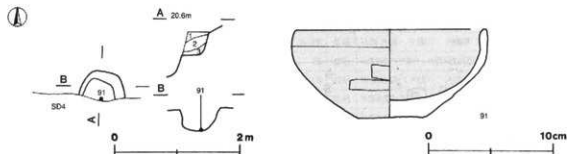
覆土 3層に分層される。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片10点（椀類7、甕類3）が出土している。91は底面から正位で出土している。

所見 時期は、出土土器から中期（5世紀後半）と考えられる。性格は不明である。



第16図 第80号土坑・出土遺物実測図

第80号土坑出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色调	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
91	土師器	椀	15.0	7.0	5.2	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面へラ削り後ナデ、内面剝離調整不明 底部へラ削り	中央部底面	70% PL7

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟が検出された。以下、検出された遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第32号住居跡（第17・18図）

位置 調査A区南部のC 2c8区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第69・73号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.00m、短軸2.85mの方形で、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は15~40cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦であるが、東側に向かって緩やかに傾斜している。地山のロームを平坦に掘り込み床面としている。特によく踏み固められたところは見られない。また、壁溝及びピットは検出されていない。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は、壁外への掘り込みは50cmほど、袖部幅は100cmほどである。焚口の落ち込みは検出できなかった。天井部は崩落しており、竈土層断面図中の第2・4・5層が天井部の崩落土の一部である。袖部は、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は、ほぼ平坦で北壁ラインの上に位置し、わずかに赤変している。火床部の奥には、上部に土師器甕の体部片を2片重ねた、黄褐色の粘土を円錐状にした支脚が据えられている。これは、火熱を受けて外面が赤変している。また、煙道は外傾して立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 4 暗褐色 焼土ブロック・砂粒中量
 2 にぶい黄褐色 粘土粒子・砂粒多量 5 暗褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量
 3 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子微量 6 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック微量

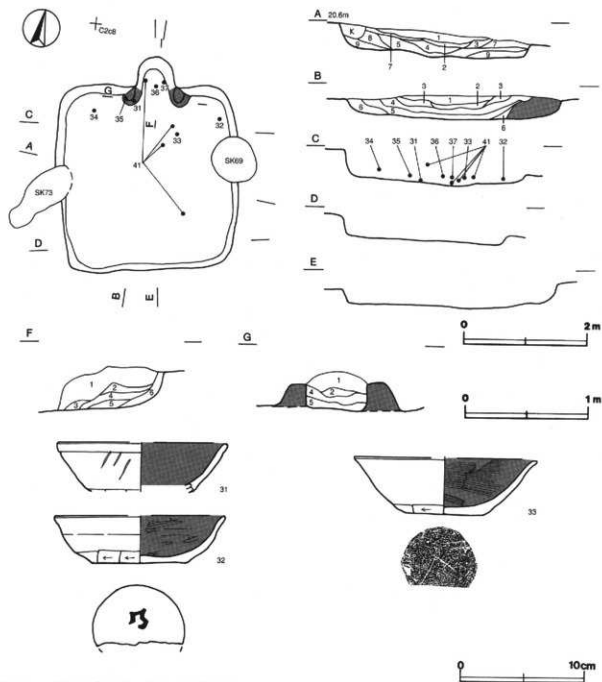
覆土 9層に分層される。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

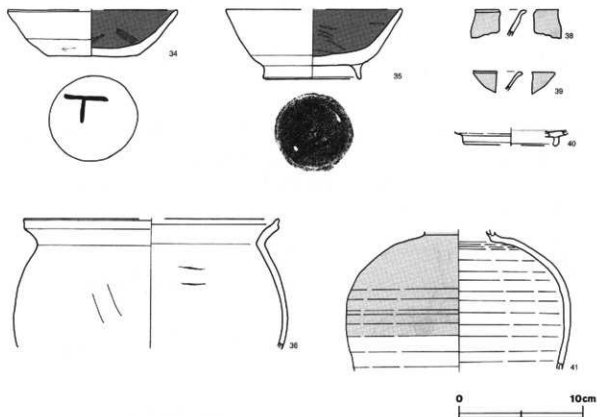
1 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7 褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	8 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子少量
5 暗褐色	焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片101点（環類22, 甕類79）、須恵器片7点（甕類7）、灰輪陶器片10点（椀5, 長頸瓶5）が、北部を中心に出土している。図示した遺物の大半は、土層断面図中の第4・5層中及び竈内から出土している。第4・5層中から出土した土器は、本跡が埋没する過程で投棄された可能性がある。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。



第17図 第32号住居跡・出土遺物実測図



第18図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表 (第17・18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
31	土師器	坏	[13.8]	(4.0)	—	雲母・長石	にぶい青	普通	体部内面黒色処理	甕西軸上	2% 体部外面刻書「川」字状
32	土師器	坏	[13.6]	3.9	7.4	長石・石英	にぶい青	普通	体部下端手持ちへう削り、内面へう磨き、底部回転へう削り	東壁際下層	45% 底部磨書「得」カ
33	土師器	坏	[14.6]	4.6	6.0	雲母・長石・石英	明褐色	普通	体部下端手持ちへう削り、内面へう磨き、底部多方向へう削り	中央部下層	45% 底部磨書「キ」字状
34	土師器	坏	[13.8]	3.7	7.0	雲母・長石・石英	黒・靑	普通	体部下端・底部回転へう削り、内面へう磨き	北西角下層	50% 底部磨書「丁」字状
35	土師器	高台付坏	[13.8]	5.7	7.7	雲母・長石	靑	普通	底部回転へう削り後、高台貼り付け、内面へう磨き	甕西軸上	50% PL.9
36	土師器	甕	[20.6]	(10.5)	—	雲母・長石・石英	にぶい青	普通	体部外面へう削り、内面ナゲ	甕腹土中	20%
38	灰釉陶器	碗カ	—	(2.0)	—	緻密	灰白灰リブ	良好	内・外面施釉、軸は刷毛塗りカ	甕土中層	5% 黒線90号窓式カ
39	灰釉陶器	碗カ	—	(1.5)	—	緻密	灰白灰リブ	良好	内・外面施釉、軸は刷毛塗りカ	甕腹土中	5% 黒線90号窓式カ
40	灰釉陶器	碗カ	—	(1.3)	[7.6]	緻密	灰白灰リブ	良好	内面施釉、垂ね焼き底有り軸は刷毛塗りカ	甕土上層	5% 黒線90号窓式
41	灰釉陶器	長頸瓶	—	(10.9)	—	緻密	灰白灰リブ	良好	体部内・外面口クロナゲ外面施釉、軸は刷毛塗りカ	甕土下層 甕腹土中	20% 黒線90号窓式 井ヶ谷78号窓式

第33号住居跡 (第19~21図)

位置 調査A区南部のC2b7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第36号住居跡を掘り込み、第65号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.30m、短軸4.10mの方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は40~70cmで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。中央部は、地山のロームを平坦に掘り込み床面としているが、各コーナー部は貼床である。貼床は、各コーナー部を不定形の土坑状に掘り込み、ロームブロックを含む暗褐色土を埋上して構築されている。また、各壁下には断面J字形の壁溝が巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は、壁外への掘り込みは60cmほど、袖部幅は120cmほどである。焚口の落ち込みは、明確には検出できなかった。天井部は崩落しており、竈土層断面図中の第2~6・10・12層が天井部の崩落土の一部である。火床部は、長軸140cm、短軸100cmほどの長方形の掘り込みを、ローム主体の暗褐色土を埋上して作られている。火床面は、ほぼ平坦で北壁ラインの内側に位置し、火熱を受けて赤変硬化している。また、煙道は外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	14 褐 色	砂粒多量、焼土粒中量
2 暗 褐色	砂粒中量、粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	15 濃い赤褐色	粘土ブロック・砂粒多量
3 濃い赤褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	16 暗 褐色	砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
4 暗 褐色	砂粒中量、焼土ブロック・粘土ブロック微量	17 濃い赤褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土ブロック微量
5 暗 褐色	砂粒中量、焼土ブロック・粘土粒子少量	18 褐 色	砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
6 濃い赤褐色	粘土ブロック・砂粒中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	19 暗 褐色	砂粒多量、ローム粒子中量、焼土ブロック微量
7 暗 褐色	焼土粒子・炭化粒子中量	20 暗 赤褐色	焼土ブロック・砂粒中量
8 暗 褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック少量、ロームブロック微量	21 暗 赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土ブロック微量
9 黒 褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	22 暗 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
10 暗 赤褐色	焼土ブロック多量	23 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量
11 褐 色	砂粒中量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量	24 赤 褐色	焼土ブロック多量
12 暗 褐色	砂粒中量、焼土ブロック少量		
13 暗 褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量		

ピット 5か所。P1は、南壁寄りの中央部に位置しており、出入り口施設に伴うピットである。P2~P5は、掘り方調査で検出された。P2・P5は竈袖部の外側、P3・P4は中央部に位置している。

ピット土層解説

1 褐 色	ロームブロック中量
-------	-----------

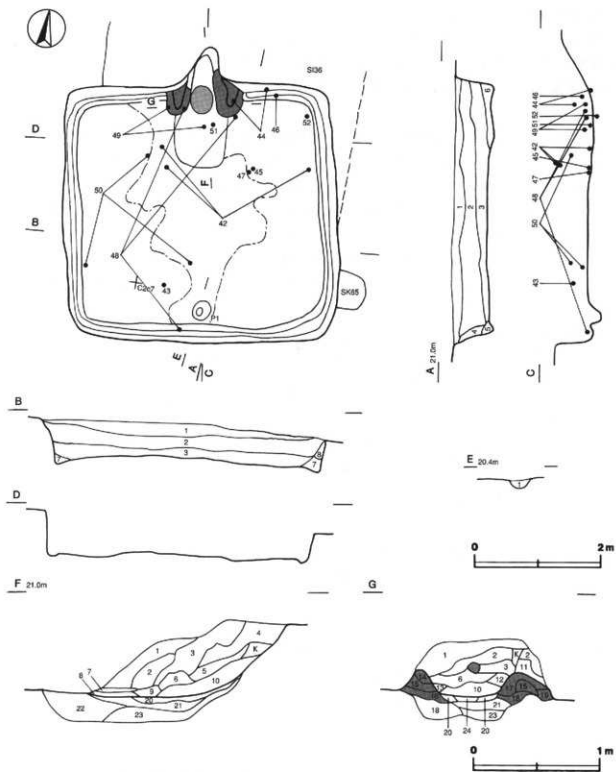
覆土 8層に分層される。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

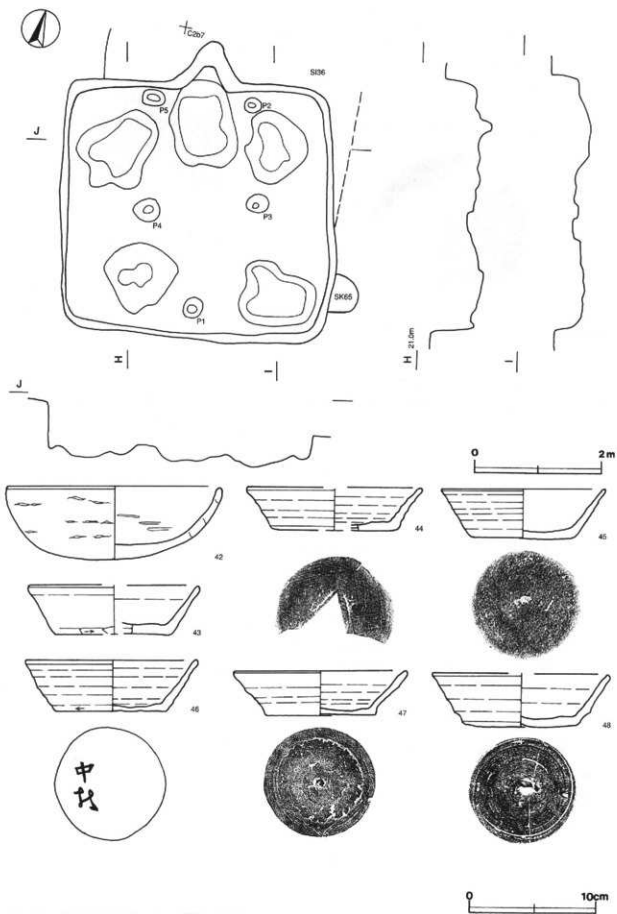
1 暗 褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量	6 暗 褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 暗 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
3 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
4 褐 色	ロームブロック・炭化粒子微量		
5 褐 色	ローム粒子少量、焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片392点(環頸69, 変頸323), 須器器片154点(環頸134, 蓋10, 盤10)が出土している。細片は全域から散在した状態で出土しているが、比較的人形の破片は北部の壁際を中心に出土している。47は中央部北東寄りの床面から正位の状態で出土し、その上には45が重ねられている。

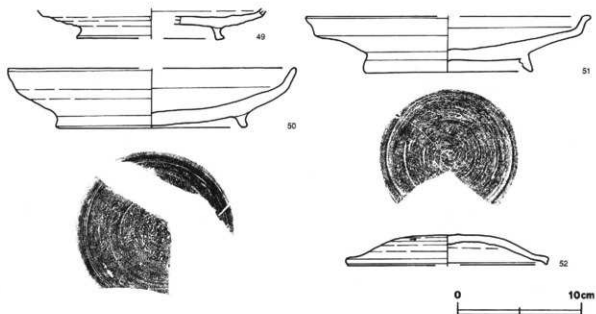
所見 時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第19图 第33号住居跡実測図



第20図 第33号住居跡・出土遺物実測図



第21図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表 (第20・21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	土師器	坏	17.0	5.7	—	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面輪筋み状、内面ヘラ磨き	北郷下層	70% PL.9
43	須恵器	坏	[13.4]	3.9	[9.0]	雲母・長石	灰	普通	体部下縁持ちヘラ磨り、底部回転ヘラ削り	南部中層	40% PL.8
44	須恵器	坏	[13.8]	3.4	[8.7]	雲母・長石・石英	黄 灰	普通	底部多方向のヘラ削り	北郷下層	30%
45	須恵器	坏	13.0	3.9	8.0	雲母・長石・石英	黄 灰	普通	底部多方向のヘラ削り	中央部床面	95% 底部磨き [□]家カ PL.8
46	須恵器	坏	13.8	4.0	8.6	長石・石英	暗 灰	普通	体部下端・底部回転ヘラ削り	北郷下層	85% 底部磨き [中□] PL.8
47	須恵器	坏	13.6	3.5	8.7	雲母・長石・石英	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ削り	中央部床面	70% PL.9
48	須恵器	坏	[14.0]	4.2	8.8	雲母・長石	黄 灰	普通	底部回転ヘラ削り	竈前・南 郷階床面	40%
49	須恵器	盤	—	(2.5)	[11.8]	長石	黄 灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	竈前床面	10%
50	須恵器	盤	[23.0]	4.8	15.4	雲母・長石・石英	灰 黄	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	西郷階・中 央部中層	40%
51	須恵器	盤	[22.8]	4.5	13.3	長石・石英	灰 黄	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け	竈前下層	60%
52	須恵器	蓋	[16.0]	(2.4)	—	長石	灰	普通	天井部左回転のヘラ削り	北東角床面	30%

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第22・23図)

位置 調査A区南端のC 2 e6区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第35号住居跡を掘り込んでいる。また、第68号土坑が本跡内に位置しているが、切り合いがないため新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行4間、梁行2間の身舎に、四面庇が付属する建物跡で、桁行方向をN-78°Eとする東西棟である。桁行は身舎だけで8.80m、庇の部分を含めると11.60mであり、梁行は身舎だけで5.60m、庇の部分を含めると8.80mである。柱間寸法は桁行が2.10mほど、梁行が2.70mほどである。身舎と庇の間は1.50mほどである。

柱穴 身舎の柱穴の平面形は、長軸1.05~1.60m、短軸0.95~1.25mの隅丸長方形または径1.30mほどの円形である。庇の柱穴の平面形は、長軸0.75~1.10m、短軸0.70~0.95mの隅丸方形または楕円形で、身舎の柱穴より小形である。身舎・庇ともに平面形に、規格性は見られない。柱痕はP1~P13・P15・P16・P21・P22で確認され、1層断面図中の第1~10層が相当し、しまりが弱い。埋土はロームブロックを含んだ暗褐色土や黒褐色土または褐色土が互層になっており、叩き締められて版築状を呈している。また、P5・P7~12・P16・P23の底面からは厚さ2cmほどの粘土の硬化層が、P1~P4の底面からは硬化面がそれぞれ検出されている。なお、P1・P9に対応する北庇の柱穴は、想定される位置を精査したが検出されていない。

土層解説

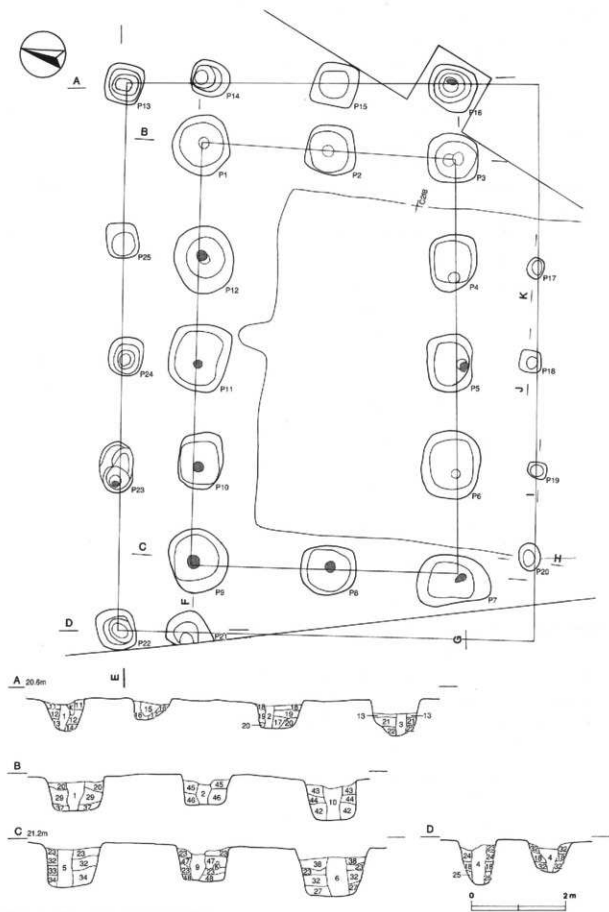
1	暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	25	暗褐色	ロームブロック少量
2	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	26	暗褐色	ロームブロック中量、黒色土ブロック微量
3	黒褐色	ロームブロック少量	27	黒褐色	ロームブロック微量
4	暗褐色	ロームブロック少量	28	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	29	黒褐色	ロームブロック少量
6	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック微量	30	黒褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量
7	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子・炭化粒子微量	31	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・粘土粒子微量
8	黒褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	32	黒褐色	ロームブロック少量
9	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量	33	黒褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
10	暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子微量	34	暗褐色	粘土ブロック・黒色土ブロック中量、ロームブロック少量
11	暗褐色	炭化物中量、ローム粒子少量、粘土粒子・黒色土粒子微量	35	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
12	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・黒色土粒子微量	36	暗褐色	ロームブロック中量
13	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・黒色土粒子微量	37	黒褐色	ロームブロック少量、黒色土粒子微量
14	暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	38	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
15	暗褐色	ローム粒子少量	39	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
16	暗褐色	ロームブロック少量、黒色土粒子微量	40	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
17	暗褐色	ローム粒子中量	41	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック微量
18	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	42	暗褐色	ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量
19	暗褐色	ロームブロック・黒色土ブロック少量	43	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
20	暗褐色	ロームブロック中量	44	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
21	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量	45	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
22	暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量	46	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
23	暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	47	暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化物微量
24	暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量	48	暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片200点(環類83, 甕類117)、須恵器片6点(環類6)が出土している。54はP3から、55はP5から、56はP2の柱痕から、それぞれ出土している。

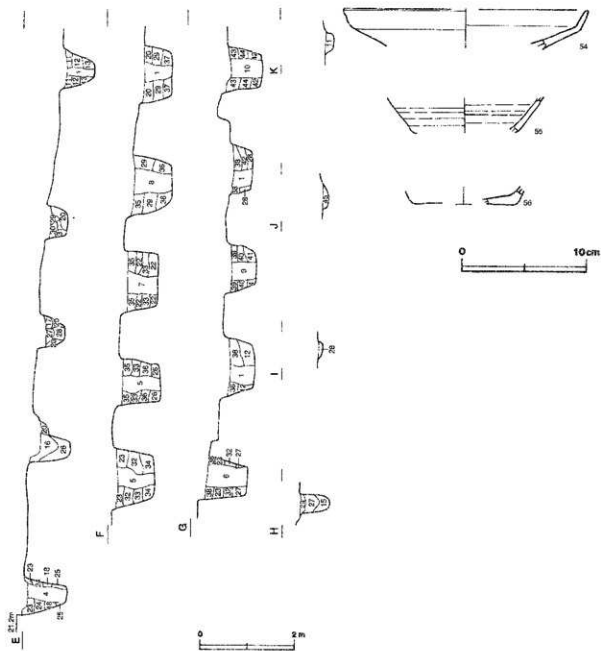
所見 時期は、出土土器及び隣接する住居跡の時期から8世紀後半から9世紀中華の因と考えられる。規模や構造、さらに当該区から出土している鉄鉢形土器や「上寺」・「X寺」と曇書された土器及び瓦塔などの仏具的な遺物を勘案すると、本跡は当該期の集落の中心的な役割を担っていた仏教的建物跡と考えられる。

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第23図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
54	須恵器	甕	[19.6]	(3.1)	—	雲母・長石・石英	灰黄	普通	口縁部、体部内・外面ロクロナデ	P3層土中	10%
55	須恵器	甕	—	(2.9)	—	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	P5層土中	10%
56	須恵器	甕	—	(1.3)	[6.9]	雲母・長石・石英	灰	普通	底部側面へラ削り	P2柱根	5%



第22图 第1号插立柱建物跡実測图



第23図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期及び性格不明の上坑14基、溝跡1条が検出されている。また、試掘、表土除去、遺構確認の段階で、遺構に伴わない川貝器時代から近世にかけての遺物が出土している。以下、検出された遺構と遺物について記載する。遺構外出土遺物については、特色ある遺物を抽出し、実測図（第27～29図）を掲載し、解説は観察表で記載する。

(1) 上坑

第61号土坑（第24図）

位置 調査A区南部のB2J8区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第62号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.77m、短径0.68mの楕円形で、長径方向はN-13°-E、深さは50cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。覆土にしまりがなく、一気に埋め戻された様相を呈しており、人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片15点（環類3、甕類12）、須恵器片1点（環類1）が出土している。

所見 遺物は細片のうえ破断面が摩滅しており、木遺構に伴うものかは判断できない。よって時期及び性格は不明である。

第62号土坑（第24回）

位置 調査A区南部のC2a8区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第61号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.70m、短軸0.69mの不整長方形で、長軸方向はN-80°-W、深さは42cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。覆土にしまりがなく、一気に埋め戻された様相を呈しており、人為堆積である。

土層解説

1 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片9点（環類1、甕類8）が出土している。

所見 遺物は細片のうえ破断面が摩滅しており、木遺構に伴うものかは判断できない。よって時期及び性格は不明である。

第64号土坑（第24回）

位置 調査A区南部のC2a7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第30号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸0.91m、短軸0.85mの不整方形で、長軸方向はN-7°-W、深さは24cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

1 黄褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 遺物は、出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。性格も不明である。

第65号土坑（第25回）

位置 調査A区南部のC2b7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第33号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 径0.65mの円形で、深さは46cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。ロームブロックが多く含まれ、埋め戻された様相を呈しており、人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片5点（環類1，甕類4）が出土している。

所見 遺物は細片のうえ破断面が摩滅しており、木遺構に伴うものかは判断できない。よって時期及び性格は不明である。

第66号土坑（第25図）

位置 調査A区南部のC2a9区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 東部が調査区域外のため、確認できた東西長は2.20m、南北長は1.45mの長方形で、長軸方向はN-83°-W、深さは30cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。ブロック状に埋め戻された様相を呈しており、人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 遺物は、出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。性格も不明である。

第68号土坑（第25図）

位置 調査A区南部のC2e7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第35号住居跡を掘り込んでいる。第1号掘立柱建物跡内に位置しているが、切り合いがないため新旧関係は不明である。

規模と形状 長軸0.95m、短軸0.75mの不定形で、長軸方向はN-41°-E、深さは30cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ブロック状に埋め戻された様相を呈しており、人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 褐色 | ロームブロック中量 |
|-------|---------------------|------|-----------|

遺物出土状況 土師器片1点（甕類1）が出土している。

所見 遺物は細片のうえ破断面が摩滅しており、木遺構に伴うものかは判断できない。よって時期及び性格は不明である。

第69号土坑（第25図）

位置 調査A区南部のC2e8区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第32号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.75m、短径0.68mの円形で、長径方向はN-62°-W、深さは25cmである。底面は凹状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。周囲から上砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 2 黒褐色 | ローム粒子微量 |
|-------|----------------|-------|---------|

遺物出土状況 遺物は、出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。性格も不明である。

第70号土坑 (第25図)

位置 調査A区南部のC 2 c6区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 長軸1.10m、短軸0.82mの隅丸長方形で、長軸方向はN-17°-E、深さは30cmである。底面は平埠で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。ロームブロックが多く含まれ、埋め戻された様相を呈しており、人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 3 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 遺物は、出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。性格も不明である。

第71号土坑 (第25図)

位置 調査A区南部のB 2 j8区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が第4号溝に掘り込まれているため、確認できた南北長は0.90m、東西長は1.66mで、平面形は楕円形と推定される。長径方向はN-10°-E、深さは35cmほどである。底面は平埠で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片3点(坏類1、変類2)が出土している。

所見 遺物は細片のうえ破断面が摩滅しており、本遺構に伴うものかは判断できない。よって時期及び性格は不明である。

第73号土坑 (第25図)

位置 調査A区南部のC 2 c7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第32号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.27m、短径0.54mの不整楕円形で、長径方向はN-40°-E、深さは15cmほどである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 2 暗褐色 | ロームブロック少量 |
|-------|-----------|-------|-----------|

遺物出土状況 鉄滓1点が出土している。

所見 時期は決定できる遺物がなく、不明である。性格も不明である。

第74号土坑 (第25図)

位置 調査A区南部のB 2 j7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第30号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸0.77m、短軸0.50mの不定形で、長軸方向はN-42°-W、深さは20cmほどである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 3 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 遺物は、出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。性格も不明である。

第75号土坑 (第25図)

位置 調査A区南部のC2e7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第32号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.32m、短径1.08mの不整楕円形で、長径方向はN-22°-W、深さは57cmほどである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 5層に分層される。ブロック状に埋め戻された様相を呈しており、人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片14点（坏類2、甕類12）、須恵器片1点（坏類1）が出土している。

所見 遺物は細片のうえ破断面が摩滅しており、本遺構に伴うものかは判断できない。よって時期及び性格は不明である。

第76号土坑 (第25図)

位置 調査A区南端のC2g7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第77号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.64m、短径0.51mの楕円形で、長径方向はN-20°-W、深さは26cmほどである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 ロームブロックを少量含む暗褐色上の単一層である。周囲から土砂が流れ込んだ様子はなく、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 遺物は、出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。性格も不明である。

第77号土坑 (第25図)

位置 調査A区南端のC2g7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第76号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.54m、短径0.45mの楕円形で、長径方向はN-25°-W、深さは27cmほどである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 ロームブロックを少量含む黒褐色土の単一層である。周囲から上砂が流れ込んだ様子はなく、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 遺物は、出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。性格も不明である。

第78号土坑 (第25図)

位置 調査A区南端のC2g7区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第34号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が調査区域外に位置しているため、確認できた東西長は0.55mである。南北長は0.60mで、平面形は楕円形と推定される。長径方向はN-75°-W、深さは20cmほどである。底面は中央部がややくぼみ、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 遺物は、出土していない。

所見 時期は、出土遺物がなく不明である。性格も不明である。

第79号土坑 (第25図)

位置 調査A区南部のB2j8区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 長軸2.85m、短軸0.82mの長方形で、長軸方向はN-76°-W、深さは15cmほどである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。ブロック状に埋め戻された様相を呈しており、人為堆積である。

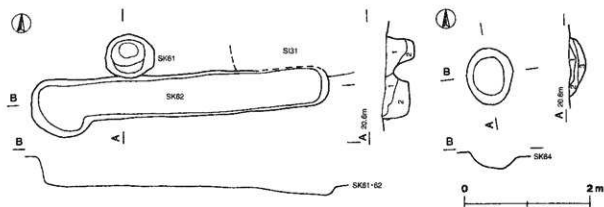
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

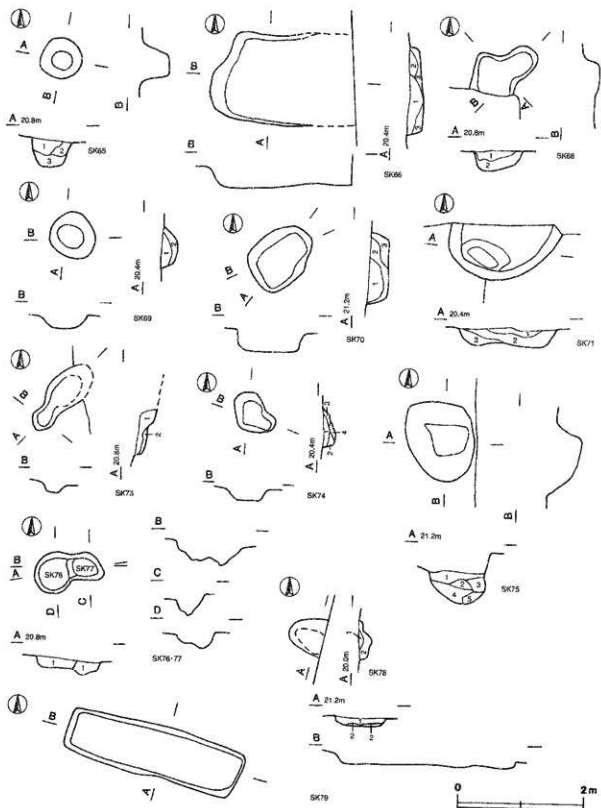
2 褐色 ローム粒少量

遺物出土状況 土師器片3点(燧類3)、須恵器片1点(坏類1)が出土している。

所見 遺物は細片のうえ破断面が摩滅しており、本遺構に伴うものかは判断できない。よって時期及び性格は不明である。



第24図 土坑実測図(1)



第25图 上坑夹测图(2)

(2) 清跡

第4号清跡 (全体图·第26图)

位置 調査A区南部のB 2 j4～B 2 j9区に位置し、台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1・29・30・31号住居跡、第71・80号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 B 2 j9区から西方向(N-85°-W)に、直線的に延びる。東部及び西部は調査区域外に延びているため、確認できた長さは20.0mである。上幅0.5～0.7m、下幅0.2～0.4m、深さは50～60cmほどで、地形に倣って東に向かって傾斜している。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 基本的に3層に分層される。周囲から土砂が流入した様相を呈しており、自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ロームブロック中量

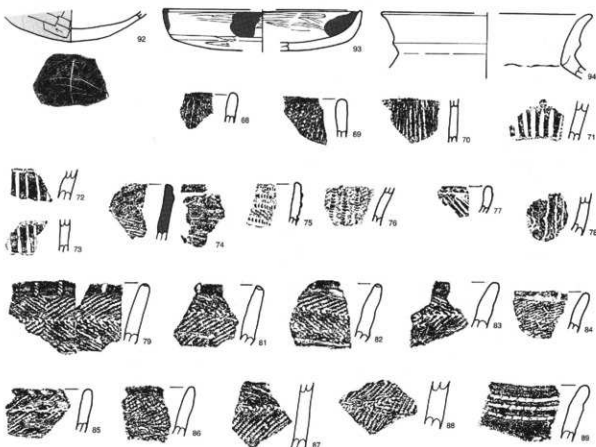
遺物出土状況 土師器片59点、須恵器片3点、陶器片2点が出土している。遺物は細片のうえ破断面が摩滅しており、本跡が埋没する際に流入したものと考えられる。

所見 最近の地籍図の草境と位置がほぼ一致しており、区画溝を兼ねた根切り溝の可能性が高い。

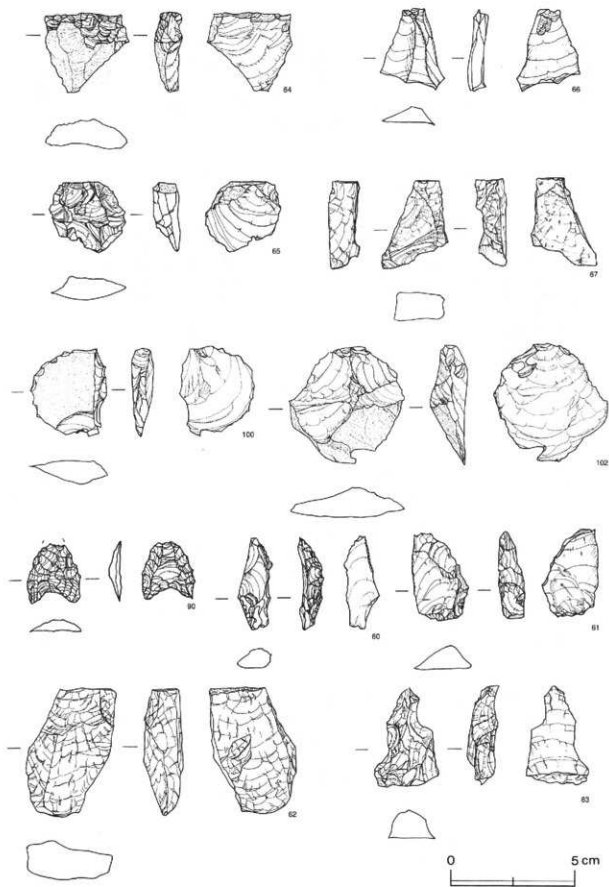


第26図 第4号溝跡実測図

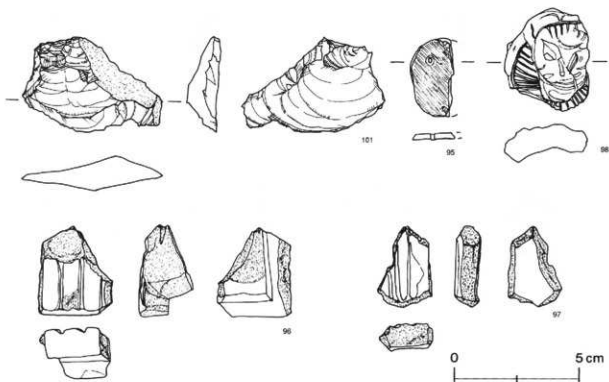
(3) 遺構外出土遺物



第27図 遺構外出土遺物実測図(1)



第28図 遺構外出土遺物実測図②



第29図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表 (第27～29図)

番号	種別	器種	計測値	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
68	縄文土器	深鉢	(2.5)	雲母・長石・石英	にぶ青	普通	口縁部に縦走る黒糸文を施文	SI1 覆土中	
69	縄文土器	深鉢	(3.0)	雲母・長石・石英	にぶ青	普通	口縁部に縦走る黒糸文を施文	C 2 b8区	PL10
70	縄文土器	深鉢	(3.5)	雲母・長石・石英	にぶ青	普通	胴部に縦走る黒糸文を施文	SK62覆土中	PL10
71	縄文土器	深鉢	(3.4)	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	縦位の沈線文を施文後、横位の沈線文を施文	表土中	PL10
72	縄文土器	深鉢	(2.3)	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	縦位の沈線文を施文後、横位の沈線文を施文	SI29覆土中	PL10
73	縄文土器	深鉢	(2.5)	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	縦位の沈線文を施文後、横位の沈線文を施文	SI29覆土中	
74	縄文土器	深鉢	(4.5)	雲母・長石・石英 緑礫	赤褐	普通	口縁部外面に右下がりの条状文を施文、内面に横方向に条状文を施文	SI30覆土中	PL10
75	縄文土器	深鉢	(3.3)	雲母・長石	橙	普通	地文に縄文を施し、横位の結節浮線文を施文	SI30覆土中	PL10
76	縄文土器	深鉢	(3.1)	雲母・長石・石英	赤褐	普通	地文に縄文を施し、縦位の結節浮線文を施文	SI33覆土中	PL10
77	縄文土器	深鉢	(2.2)	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部に斜めのキザミ目を施文	SI35覆土中	PL10
78	縄文土器	深鉢	(3.6)	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	縦位に押引文を施文	SI32覆土中	
79	縄文土器	深鉢	(4.8)	雲母・長石・石英	にぶ青	普通	口唇部に縄文原体の押圧 口縁部に単節縄文を羽状に施文	SB1 埋土中	PL10
81	縄文土器	深鉢	(4.8)	雲母・長石・石英	にぶ青	普通	口唇部に縄文原体の押圧 口縁部に単節縄文を羽状に施文	SI35覆土中	PL10
82	縄文土器	深鉢	(4.6)	雲母・長石・石英	にぶ青	普通	口唇部に縄文原体の押圧 口縁部に単節縄文を羽状に施文	SI35覆土中	
83	縄文土器	深鉢	(3.8)	雲母・長石・石英	にぶ青	普通	口縁部に単節縄文を羽状に施文	SI33覆土中	
84	縄文土器	深鉢	(3.2)	雲母・長石・石英	赤褐	普通	口唇部に縄文原体の押圧 口縁部に無節縄文を施文	SI30覆土中	PL10
85	縄文土器	深鉢	(3.5)	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口唇部に棒状工具による押圧 口縁部に単節縄文を施文	表土中	PL10
86	縄文土器	深鉢	(3.8)	雲母・長石・石英	明褐	普通	口縁部に単節縄文を施文	SB1 埋土中	PL10
87	縄文土器	深鉢	(5.4)	雲母・長石・石英	褐灰	普通	胴部に単節縄文を羽状に施文	SI35覆土中	PL10
88	縄文土器	深鉢	(3.7)	雲母・長石・石英	褐灰	普通	胴部に単節縄文を羽状に施文	SI35覆土中	PL10
89	縄文土器	深鉢	(4.0)	雲母・長石・石英	にぶ青	普通	口縁部に3条の押引文を施文	SI29覆土中	PL10

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
92	土師器	坏	—	(2.5)	—	雲母・長石・石英	明志褐	普通	体部外面へう割り、内面ナデ	表土中	砥石転用
93	土師器	甗	[16.0]	3.3	—	雲母・長石・石英	赤 褐	普通	1) 縁部内・外面へう割り 体部内面へう割り	表土中	内・外面塗粉付着
94	土師器	甗	17.0	5.2	—	長石・石英	灰い地	普通	1) 縁部内・外面横ナデ	表土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
96	瓦 塔	(3.6)	(2.8)	2.1	(16.3)	土 製	扉蓋部片 平截竹管状工具により丸瓦を表現 軒裏垂木はへう割工具による割り出しで表現	表土中	97・[171墓] DP4・5と同一体カ PL10
97	瓦 塔	(3.2)	(2.1)	1.1	(7.0)	土 製	扉蓋部片 平截竹管状工具により丸瓦を表現	表土中	96・[171墓] DP4・5と同一体カ
98	人形カ	(4.1)	(3.4)	1.5	(13.2)	土 製	内面塗粉取有り 成形は型合わせ 扉蓋部片カ	表土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
60	ナイフ	3.7	1.4	1.1	3.2	硬質頁岩	横長剥片を素材とし、先端及び一側縁にフランチングを主要剥離面側から施す	S 133覆土中	PL9
61	ナイフ	3.5	2.3	1.0	7.2	碧玉	横長剥片を素材とし、一側縁に急角度の調整を施す 刃部に微細剥離面を有する	C 2b6区	PL9
62	剥片	5.1	3.6	1.6	31.2	安山岩	断面を打面とする厚手の剥片	S 130覆土中	PL9
63	二次加工を有する剥片	4.0	2.6	1.3	10.1	安山岩	主要剥離面側から急角度の調整を施す 断面は三角形を呈する 角縁状石カ	S 130覆土中	PL9
64	剥片	3.2	3.4	1.1	9.7	硬質頁岩	打面調整及び破面を残す剥片	S K79覆土中	PL9
65	剥片	2.9	3.0	1.2	7.7	硬質頁岩	破面打面を残す剥片	C 2b6区	PL9
66	剥片	3.3	2.5	0.8	4.6	瑪瑙	縦長剥片 主要剥離面側から切断されている	S 130覆土中	PL9
67	二次加工を有する剥片	3.5	2.7	1.2	10.5	黒曜石	片手の横長剥片を素材とし、下縁に調整を施す 高標石カ	S 130覆土中	PL9
90	石 鏃	(1.6)	1.5	0.3	(0.7)	チャート	凹縁無茎鏃 先端部欠損	表土中	PL9
98	双孔石鏃	3.0	(1.8)	0.2	(2.7)	滑石	表裏鏃痕 孔径0.2cm 一部欠損	S 133覆土中	PL10
100	二次加工を有する剥片	3.6	3.1	0.9	9.7	硬質頁岩	横長剥片を素材とし、主要剥離面側から調整を施す	表土中	PL9
101	剥片	3.8	5.6	1.3	16.9	硬質頁岩	平削打面を残す横長剥片 背面に同方向の剥離面を有する	B 2b6区	PL9
102	剥片	4.7	4.6	1.6	19.5	硬質頁岩	平削打面を残す剥片 背面に多方向の剥離面を有する	C 2b6区	PL9

表2 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	基土	壁端	内部施設				出土遺物	時代	備考 本邦→SIS(旧→新)	
								土柱 (土柱)	出入口 (ピット)	ピット	竈 (竈)				
1	B 2b	N-8°-E	方形	3.30×3.20	8~36	部凸	一部	3	1	—	—	—	—	自然土師器	古墳時代中期 本邦→SIS, DM, TM1
29	C 2c	N-7°-W	方形	3.75×3.65	20~50	平削	ほぼ全周	4	2	—	竈	1	—	人為土師器、土玉、結核準	古墳時代後期 SI1→本邦→SK75, SD4
30	B 2c	N-2°-E	方形	3.90×3.65	20~50	平削	ほぼ全周	3	1	1	竈	—	—	人為土師器	古墳時代後期 SK9→本邦→SK64-71-71, SD1
31	B 2b	N-5°-W	[方形]	2.80×1.30	45	平削	一部	—	—	—	—	—	—	人為土師器	古墳時代 本邦→SK62, SD4
32	C 2d	N-8°-W	方形	3.00×2.95	15~40	平削	—	—	—	—	竈	—	—	自然土師器、須恵器、灰輪陶器	9世紀後葉 本邦→SK69-73
33	C 2d	N-10°-W	方形	4.30×4.15	40~70	平削	全周	—	1	—	竈	—	—	自然土師器、須恵器	8世紀後葉 SIS→本邦→SK65
34	C 2c	N-3°-W	[方形]	4.80×2.50	15~20	平削	—	1	1	—	—	—	—	人為土師器	古墳時代後期 本邦→SK78

番号	位置	方位	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	幅広 (cm)	深さ (cm)	壁面	内部施設				出土遺物	時代	備考 新旧関係(旧→新)	
								土柱穴 ピット	土 ピット	甲 蓋	蓋 穴				
35	C 2 c	N-7°-E	方形	2.16×2.25	25	40	外傾	4	1	1	1	土師器、土瓦、灰石	古墳時代前期	本跡→SB1、SK68	
36	C 2 c	N-0°	「方形」	1.65×1.25	25	40	外傾	2	-	-	-	自然	土師器	古墳時代中期	本跡→SI30-33

表3 土坑一覽表

番号	位置	方位	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(旧→新)
51	H 2 B	N-13°-E	楕円形	0.77×0.68	50	外傾	窪状	人為	土師器、須恵器	SK62→本跡
62	C 2 a8	N-80°-W	不整形方形	4.70×0.60	42	外傾	平坦	人為	土師器	本跡→SK61
64	C 2 a7	N-7°-W	不整形方形	0.91×0.85	24	緩斜	窪状	自然	-	SI30→本跡
65	C 2 b7	-	円形	0.65	46	外傾	平坦	人為	土師器	SI30→本跡
66	C 2 a9	N-83°-W	「長方形」	(2.20)×1.45	30	緩斜	平坦	人為	-	-
68	C 2 e7	N-41°-E	不定形	0.95×0.75	30	外傾	平坦	人為	土師器	SI35→本跡
69	C 2 e8	N-62°-W	円形	0.75×0.68	25	緩斜	平坦	自然	-	SI32→本跡
70	C 2 e6	N-47°-E	楕円長方形	1.10×0.82	30	外傾	平坦	人為	-	-
71	B 2 B	N-10°-E	「楕円形」	(0.90)×1.66	35	緩斜	平坦	自然	土師器	本跡→SD 4
73	C 2 e7	N-40°-E	不整形円形	1.27×0.51	15	緩斜	窪状	自然	灰滓	SI32→本跡
74	B 2 J7	N-42°-W	不定形	0.77×0.50	20	緩斜	窪状	自然	-	SI30→本跡
75	C 2 e7	N-22°-W	不整形円形	1.32×1.08	57	緩斜	窪状	人為	土師器、須恵器	SI32→本跡
76	C 2 g7	N-20°-W	楕円形	0.64×0.54	26	緩斜	窪状	人為	-	SK77→本跡
77	C 2 g7	N-25°-W	楕円形	0.34×0.45	27	緩斜	窪状	人為	-	本跡→SK76
78	C 2 g7	N-75°-W	「楕円形」	(0.55)×0.60	20	外傾	窪状	自然	-	SI34→本跡
79	B 2 B	N-76°-W	長方形	2.85×0.82	15	外傾	平坦	人為	土師器、須恵器	-
80	B 2 B	-	「円形」	(0.50)×0.70	40	外傾	平坦	自然	土師器	古墳時代中期 本跡→SD 4

第4節 まとめ

下大井遺跡は、平成11年度及び平成13年度の調査で計5,924.81㎡が発掘調査された。既に4,136.78㎡については調査報告が『茨城県教育財団文化財調査報告第171集』として刊行されている。ここでは、平成11年度の調査分と合わせて、当遺跡から検出された遺構・遺物について概観を述べ、さらに若干の考察を加えまとめたい。なお、今回までに調査された面積は、下大井遺跡として周知されている範囲のわずか20分の1にも満たない面積であり、遺跡全体の景観をとらえるまでには至っていないことを予め断っておく。

1 検出された遺構と遺物

(1) 旧石器時代から弥生時代

今回の調査区内からは、旧石器時代から弥生時代にかけての遺構は検出されていない。今回の調査では、旧

石器時代の石器がC2a6区を中心に採集されている。この付近から採集された石器はナイフ形石器2点（硬質頁岩・碧玉）、剥片12点（安山岩4・硬質頁岩2・珪質頁岩4・瑪瑙1・黒曜石1）である。平成11年度調査区から出土している石器類の石質は全体の22%が頁岩であり¹⁾、今回、採集された石器類も頁岩が多数を占めている。

縄文時代の遺物は、今回の調査区から土器片、石鏃が採集されている。土器片は、早期前半の燃糸文系土器、前期後半の浮島式、前期末～中期初頭の粟島台式・下小野式、中期前半の阿玉台式である。これらの土器片は平成11年度調査区から検出されている遺構・遺物と一致するものであり、当遺跡は継続的ではないものの、早期前半から晩期までの長期間にわたって、生活の場として利用されていたと考えられる。

弥生時代の遺物は、検出されていない。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は新たに、中期（5世紀後半）の竪穴住居跡1軒、後期（6世紀後半）の竪穴住居跡3軒、詳細は不明ながらこの時代と考えられるもの2軒、および中期の土坑1基が検出された。中期の住居跡は、調査面積が狭いことも考慮しなければならないが、調査区全域から2軒しか検出されていない。この時期の住居は、2軒ないし3軒を単位として構成されていたと想定される。後期の住居跡は、台地の縁辺部から検出されている。調査B区の大半は、斜面部が削平されており遺構は検出されていない。しかし、台地上の竪穴住居跡とは3mほど比高のある調査B区の斜面部から、1軒ではあるが竪穴住居跡が検出されている。このことは、この時期の竪穴住居が台地の縁辺部から斜面部にかけて展開していたことを示すものと推測される。

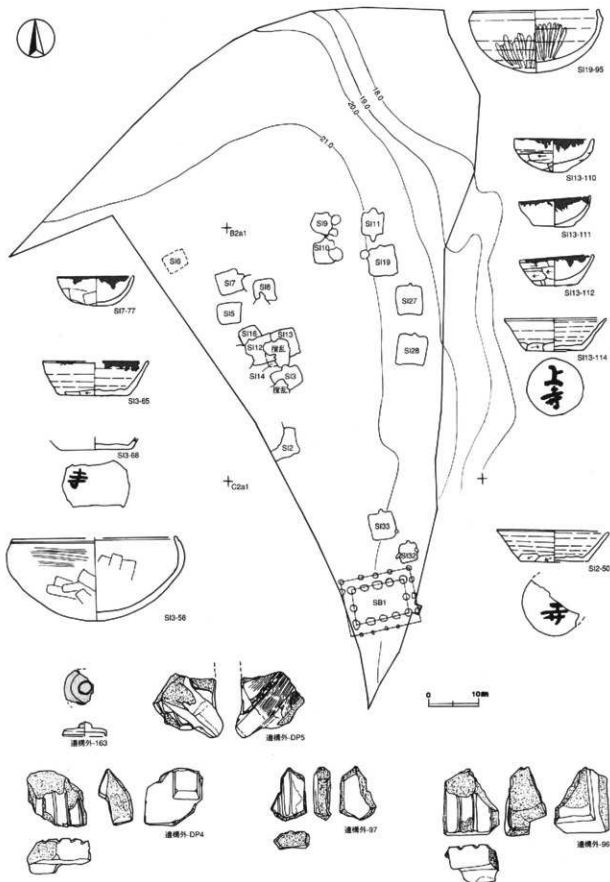
竪穴住居跡から出土した遺物は、在地の土師器が主で、まれに石器（砥石・紡錘車）が混じる。他地域との頻繁な交流を示すような遺物は出土していない。

(3) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は新たに、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟が検出された。この時代の竪穴住居跡は合計18軒となり、当遺跡の中心となる時期である。当遺跡周辺で、この時代の竪穴住居跡が検出されている遺跡には、ヤツノ上遺跡²⁾、中久喜遺跡³⁾、東山遺跡⁴⁾、馬場遺跡⁵⁾、行人田遺跡⁶⁾、中下根遺跡⁷⁾、華入山遺跡⁸⁾があるが、その数は合計しても30軒ほどであり、当遺跡は密度が濃いと言えよう。

この時代の竪穴住居跡は、その位置により台地の縁辺部に並ぶ東側のグループと、やや台地の奥に並ぶ西側のグループの二つに分けることができる⁹⁾。これらの竪穴住居跡は位置だけでなく、遺構の形態や出土遺物からも二分される。東側のグループ（第9～11・19・27・28・33号住居跡）の形態は、一辺が4mほどの比較的整った平面形で、竪は北壁に付設されている。これに対して西側のグループ（第2・3・5・6・7・8・12～16号住居跡）の形態は、一辺3.5m内外で、平面形に歪みが見られるものがあり、竪は南東か北東のコーナー部あるいは東壁に付設されている。さらに出土遺物についても、東・西二つのグループには偏りが見られる。西側のグループを構成する竪穴住居跡からは、「上守」「×守」と墨書された土器や鉄鉢形土器、さらに灯明に用いられたとみられる環などの仏教関連遺物が出土しているのに対して、東側のグループからは、鉄鉢形土器が1点出土しているのみである。また、「上家」（「□家」カも含める）と墨書された土器が、第2・10・27・33号住居跡及び第1号ピット群からと、東側のグループの9世紀前半に位置付けられる住居跡から多く出土する傾向にある。

竪穴住居跡から出土している遺物は、主に土師器や須恵器で、灰釉陶器、石器（紡錘車）、鉄器・鉄製品（刀子・鎌・鉾具）が少数ながら出土している。ここで注目されるのは、前述したように当遺跡に仏教思想が浸透



第30図 仏教関連遺物出土位置図

表4 埴書土器一覧表

文字	器種	部位・方向	遺物番号	遺物番号	出土遺構時期	備考
馬方	須恵器 坏	底部外面	SI23	22	6世紀末～7世紀初	『171集』奈良 住原岡尾後の埴書
上家	須恵器 坏	底部外面	SI 2	51	8世紀後葉	『171集』参照
×寺	須恵器 坏	底部外面	SI 2	50	8世紀前葉	『171集』参照
×寺	須恵器 坏	底部外面	SI 3	68	9世紀前葉	『171集』参照
上家	須恵器 坏	底部外面 体部外面横位	SI10	97	9世紀前葉	『171集』参照
上家	須恵器 坏	底部外面	SI10	98	9世紀前葉	『171集』参照
上家	須恵器高台付坏	底部外面	SI10	101	9世紀前葉	『171集』参照
上家	須恵器 甕	底部外面	SI10	103	9世紀前葉	『171集』参照
上	須恵器高台付坏	底部外面	SI10	102	9世紀前葉	『171集』参照
上寺	須恵器 坏	底部外面	SI13	114	9世紀中葉	『171集』参照
馬方	須恵器 坏	底部外面	SI16	115	8世紀後葉	『171集』参照
上家	須恵器 坏	底部外面	SI27	125	9世紀前葉	『171集』参照
上家	須恵器高台付坏	底部外面	SI27	126	9世紀前葉	『171集』参照
上家	須恵器 坏	底部外面	第1号ピット群	139	8世紀後葉	『171集』参照
得カ	土師器 坏	底部外面	SI32	32	9世紀後葉	
Jカ	土師器 坏	底部外面	SI32	34	9世紀後葉	
□家カ	須恵器 坏	底部外面	SI33	45	8世紀後葉	
中□	須恵器 坏	底部外面	SI33	46	8世紀後葉	

していたことをうかがわせる遺物が出土していることである。表土中からの出土ではあるが、三彩陶器蓋片や瓦塔片が出土しており、それを裏付けるものと考えられる。

掘立柱建物跡は、桁行4間、梁行2間の身舎に、四面庇が付属する東西棟で、台地の縁辺部に位置している。瓦片が出土していないことから、上屋構造は板葺きあるいは茅葺きであったと想定される。柱穴から出土した遺物は時期を判断できるものは少なく詳細な時期は不明であるが、隣接する塚穴住居跡の時期から、8世紀後葉から9世紀中葉の間と推定される。その規模や構造、本跡の北方の竪穴住居跡から出土している仏教関連遺物を勘案するとき、本跡は仏堂的な建物跡であった可能性が高い。

(4) 中・近世

今回の調査区からは、中・近世の遺構は検出されていない。平成11年度の調査区からは、土壇墓1基、塚1基が検出されている。土壇墓からは、人骨1体分、瀬戸・美濃系の端反皿、火打金、火打石、古銭が出土している。また、塚からは土師質の小皿が出土している。土壇墓がつくられた16世紀には墓域として、その後は信仰の対象とされた可能性が考えられる³⁶。

2 考察

以上のように各時代を概観したとき、当遺跡で最も注目されるのは1棟の掘立柱建物跡とそれを性格付ける仏教関連遺物であろう。

第1号掘立柱建物跡は、古墳時代最後の住居が廃絶されてから1世紀半以上の空白期間を経て、8世紀後葉に

集落の再成立と同時に出現する。当遺跡の周辺地域で、仏堂と考えられる掘立柱建物跡は、つくば市の烏名熊の山遺跡¹⁾、東岡中原遺跡²⁾、土浦市の根鹿北遺跡³⁾、寺畑遺跡⁴⁾、長峰遺跡⁵⁾、牛久市のヤツノ上遺跡⁶⁾で検出されている⁷⁾。

上記の6遺跡で検出されている掘立柱建物跡と、当遺跡で検出された掘立柱建物跡との共通点を挙げれば、まず、その掘立柱建物跡が所在する位置を挙げることができよう。いずれの掘立柱建物も低地を望む台地の縁辺部に位置しており、当時の人々は遠くからでも建物を仰ぎ見ることができたであろう。それは集落のシンボルであり、ランドマーク的な意味合いもあったのではなからうか。次に、掘立柱建物跡が存在していたと考えられる年代であるが、烏名熊の山遺跡の掘立柱建物跡を除いて、いずれも9世紀代に収まる。これは、8世紀中葉の国分寺造営以降の一般集落への仏教思想の浸透と、私度僧・民間伝道僧の布教活動が活性化化する時期と一致する。また、当遺跡の第1号掘立柱建物跡の上層構造は、板葺きもしくは茅葺きと想定され、柱穴の掘方に規格性はみられない。さらに、柱落もきれいには通らない。これらのことから官による関与は考えられず、在地の有力者による造営もしくは集落による造営と推測される。残念ながら当遺跡の場合、調査面積が限られているため有力者の存在の有無を確認することはできず、誰が造営の主体者になったのかは不明である。

当遺跡から出土している仏教関連遺物は、「1 検出された遺構と遺物」でも述べたように、その多くがコーナー部に竈が付設された住居跡から出土している。コーナー部に竈が付設された住居跡の例は、周辺遺跡でも幾つか知られている⁸⁾。しかし竈の位置がコーナー部であり、なおかつ仏教関連遺物が出土しているとなると、つくば市の東岡中原遺跡第438号住居跡⁹⁾、明石遺跡120・125号住居跡¹⁰⁾ などその例は限られている。いずれの住居跡も8世紀後半から9世紀後葉の間に位置付けられ、当遺跡の住居跡はその時間枠に収まる。類例は少ないが当遺跡に限って言えば、仙波亨氏が指摘しているように¹¹⁾、コーナー部（またはコーナー部付近）に竈が付設された住居は、仏教に関わる人々の住む特異な空間であったのではなからうか。そして、その人々が第1号掘立柱建物跡の維持・運営に関わっていたのではないだろうか。

このように8世紀後葉以降、当遺跡には仏教思想が浸透していたことが、遺構・遺物の両面からうかがえる。さらに、8世紀後葉以降の約半世紀間の遺構・遺物は、一般的な集落とは様相を異にしている。これは当遺跡が、「上寺」・「上家」の墨書土器を所有する血縁・地縁集団が中心となり、仏堂と考えられる第1号掘立柱建物を結節点として、精神的に結び付いた集落であった可能性を示すものではないだろうか。

3 おわりに

繰り返すことになるが、今回までの調査は下大井遺跡全体のわずかな部分にすぎない。遺跡はさらに台地上の南方及び西方に広がっており、大規模な集落が展開されていた可能性が考えられる。今後、下大井遺跡の発掘調査が実施される際には、この調査報告が生かされれば幸いである。最後に平成11年度から発掘現場や整理作業で御指導・御助言を賜った方々に、改めて感謝の意を表したい。

※第30図は註9)に、表4は註1)に、それぞれ加筆した。

註

1) 川津法雄「一般国道468号谷部圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書1 下大井遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第171集 茨城県教育財団 2001年3月

- 2) 小高五十二「牛久北部特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) ヤツノ上遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第81集 茨城県教育財団 1993年3月
- 3) 葉井保雄「牛久北部特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集 茨城県教育財団 1993年9月
- 4) 松浦 敏「牛久北部特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ) 東山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第101集 茨城県教育財団 1995年9月
- 5) 白田正子「牛久北部特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ) 馬場遺跡 行人田遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第106集 茨城県教育財団 1996年3月
- 6) 註5)と同じ
- 7) 深谷憲二・柴田博行「牛久東下根特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中下根遺跡 西ノ原遺跡 華人山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第113集 茨城県教育財団 1996年6月
- 8) 註7)と同じ
- 9) 川井正一「遺跡紹介—仏教関連遺物出土遺跡—下大井遺跡」『研究ノート』第11号 茨城県教育財団 2002年6月
- 10) 註1)と同じ
- 11) 福田義弘「高名・福田坪一体型特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 桶ノ山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第190集 茨城県教育財団 2002年3月
第131号複柱建物跡は、仏堂的な建物跡の可能性が指摘されている。
- 12) 高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・高田和宏「中根・金田台特定土地地区内整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 中原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 茨城県教育財団 2001年3月
- 13) 関口満・吉沢 悟・日高 慎「根原北遺跡・栗山南跡発掘調査報告書」『土浦市今泉区部並強工事事業地内埋蔵文化財調査報告書』土浦市遺跡調査会 1997年3月
- 14) 黒澤春彦「茨城県土浦市田村・沖宿跡跡群」『日本考古学年報45』日本考古学協会 1994年7月
- 15) 黒澤春彦・望田志「長峰遺跡」『田村・沖宿土地地区内整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第3集 土浦市遺跡調査会 1997年3月
- 16) 註2)と同じ
- 17) 白田正子「九重東阿彌寺確認調査報告書1」 茨城県教育財団 2001年3月
九重東阿彌寺は郡寺と推定されており、比較の対象から除外した。
- 18) 仙波 亨「コーナーに竈を持つ住居跡について」『研究ノート』第9号 茨城県教育財団 2001年6月
- 19) 註12)と同じ
- 20) 寺門千磨・大関 武「主要地方遍つば真岡郡緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財報告書 明石遺跡 明石北原遺跡 上白畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第164集 茨城県教育財団 2000年3月
明石遺跡第125号住居跡の竈はコーナー部には付設されていないが、東壁の北東コーナー部に近い位置に付設されているため、ここで類例として取り上げた。
- 21) 註18)と同じ

参考文献

- ・須田 勉「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探訪』Ⅱ 早稲田大学出版部 1985年12月
- ・高木樹之「村落内寺院」の展開(中)―地方における仏教の受容―『神奈川考古』第31号 神奈川考古同人会 1995年4月
- ・千葉県立房総風土記の丘「シンボジウム 平安前期の村落と仏教<記録集>」『千葉県立房総風土記の丘年報14—平成2年度—』1992年11月
- ・財団法人千葉県文化財センター「古代仏教遺跡の諸問題—重要遺跡確認調査の成果と課題1—」『千葉県文化財センター研究紀要』18 1997年9月
- ・平川 南『墨書土器の研究』古川弘文館 2000年11月

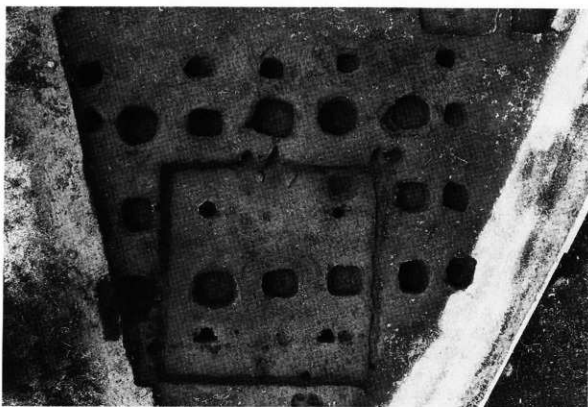
写真図版



下大井遺跡全景



調査終了状況

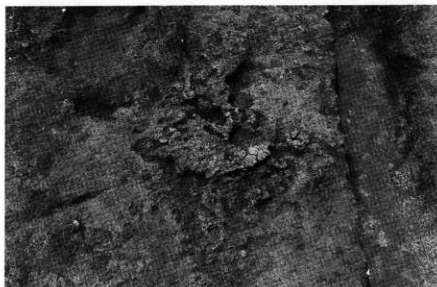


第1号掘立柱建物跡掘り方完掘状況

PL2



第1号住居跡
完掘状況



第1号住居跡
炉完掘状況



第29号住居跡
完掘状況



第29号住居跡
遺物出土状況



第30号住居跡
完掘状況

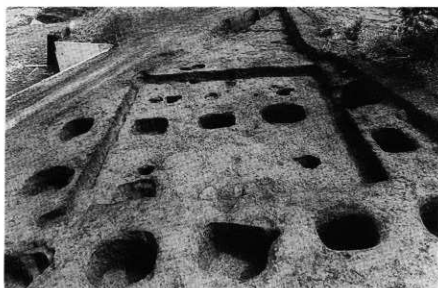


第31号住居跡
完掘状況

PL4



第34号住居跡
完掘状況



第35号住居跡
完掘状況



第80号土坑
遺物出土状況



第32号住居跡
完掘状況



第33号住居跡
遺物出土状況



第33号住居跡
完掘状況

PL6



第33号住居跡
遺物出土状況



第33号住居跡
掘り方完掘状況



第4号溝跡
完掘状況



SI29-2



SI35-10



SI35-11



SI35-14



SI35-15



SI35-18



SI35-16



SK80-91



SI29-3

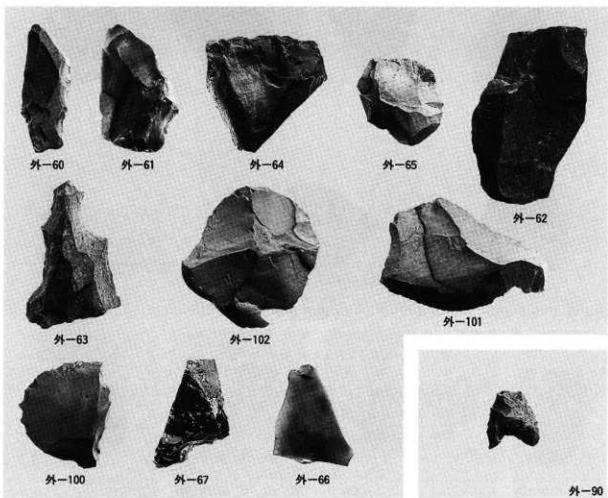


SI30-9

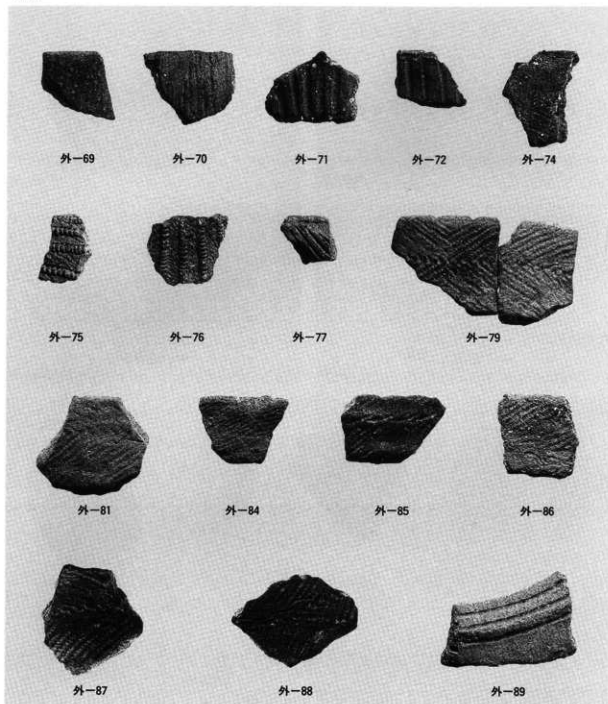
PL8



第29・32・33・35号住居跡出土遺物



第32・33・35号住居跡，遺構外出土遺物



第29号住居跡，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第197集

下大井遺跡 2

2003 (平成15) 年 3 月 21 日 印刷

2003 (平成15) 年 3 月 26 日 発行

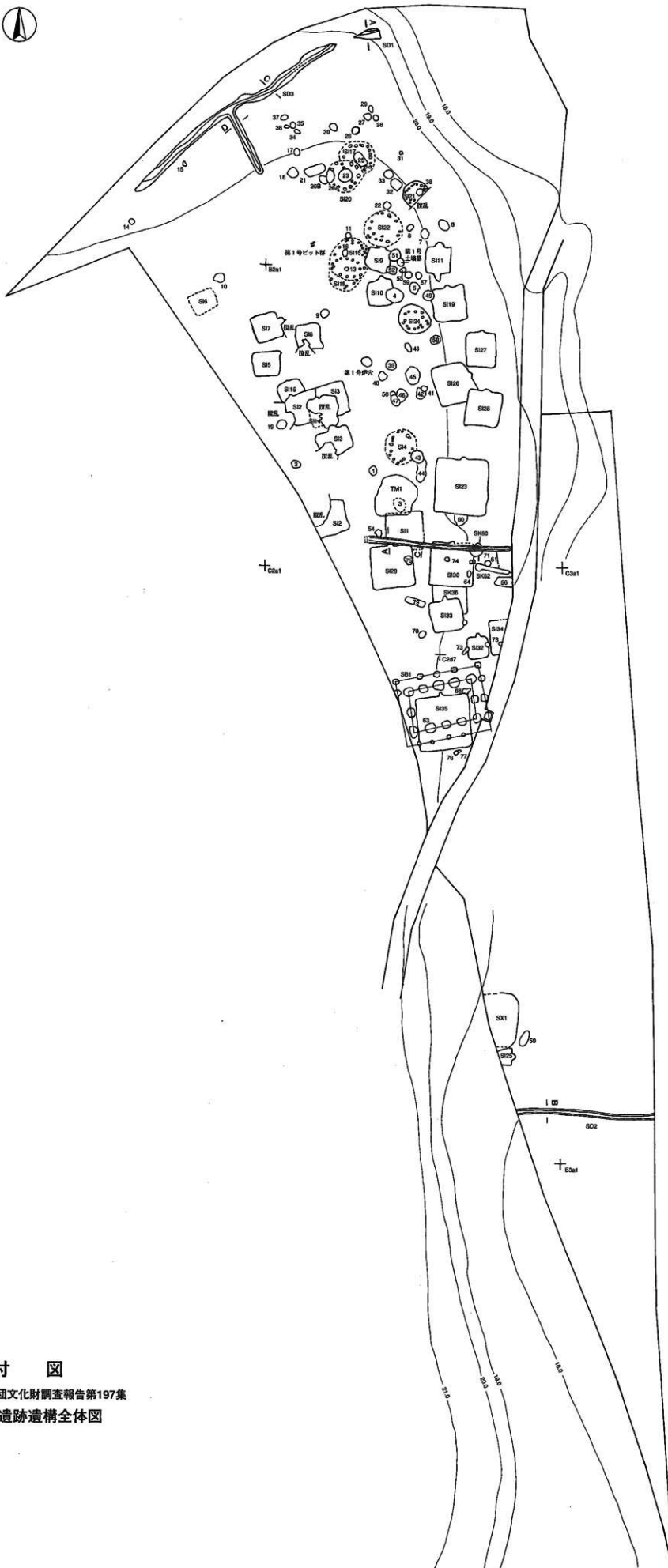
発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和 1 丁目356番地の2
茨城県水戸生遊学習センター分館内
T E L 029-225-6387

印刷 いばらき印刷株式会社
〒319-1112 茨城県那珂郡東海村平原3115-3
T E L 029-282-0370

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第197集

下大井遺跡遺構全体図



付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第197集

下大井遺跡遺構全体図

